

神宮文庫所蔵

『徒然草摘議』 翻刻並解説略注

大 坪 利 絹

【解説】

一、『徒然草摘議』の出現まで

研究史から徒然草を眺めるに、注釈的研究と論評的研究の二つの流れが認められ、その研究書の刊行もこの二つの流れに沿って検討するのが便利である。最初は当然の事ながら語釈的簡潔なものであったが、次第に精密度が濃くなつて、文意文脈的な注釈および批評的思想的考察が強まつてくる。そしてそれらが総合化され大成化されるのと略々前後して、注釈そのものより批評や思想を重視する論評的研究が出現するに至る。今、主な著述を中心に、具体的に言えば、『徒然草寿命院抄』がまず現れる（慶長九年刊、秦宗巴著）。これは「抄する所、要語の摘註にして、而も大略に過ぎず（野村八郎・国文学研究史）」といわれる内容であり、次いで『徒然草野槌』（元和七年刊、林羅山著）が出るが、これは「語句の註解は一わたりさるものにして、各段の要旨を叙べ、感想を附し、又は批評にも及べる点は注目すべきものあり（野村氏・前出書）」といった内容であるが、その重心は註解にあり「該博な

る学者の手に成りしこととて、後の註者極めて多く之を典拠に仰（野村氏・前出書）「いだものである。続いて『鉄槌』（慶安元年、青木宗胡著）があるが「何等の新面目無し（野村・前出書）」体のものである。併し続く『なぐさみ草』（慶安五年、松永貞徳著）は「もつぱら野槌の説によりて、その上に一段々々の大意をかきくはへたるものなり（群書一覽卷三）」ではあるが、寿命院抄、野槌にこれを加えて「開拓期の三名著といいたい（富倉徳次郎・三省堂国語国文学研究史大成六巻）」と稱えられた著である。次いで『金槌』（万治元年、西道智著）、『徒然草古今鈔』（同年、大和田氣求著）、『徒然草古今大意』（同年、大和田氣求板行）等が上梓される。この中の『古今大意』は「立安（寿命院秦宗巴ナリ）道春（林羅山ナリ）及び貞徳の三家の論評を抜萃せり……中略……此は編者唯纂輯の勞をとりしのみにして、些の創意の含まれざる物なれど、当時読書家に便益を与へたることは、推測に難からず（野村氏・前出書）」といった述作で、他の二つも大同小異の著であるらしい。次いで貞徳門下に属する加藤馨齋と北村季吟の著作が出現するのであるが、まず『徒然草抄』（寛文元年、馨齋著）。これは彼の『長明方丈記抄』と同様「仏教的解釈の濃厚（野村氏・前出書）」なる傾向があり、後に論評的著述として出現する——例えばここに翻刻した『徒然草摘議』——の著書達の批判の対象となるのである。馨齋は「天台止観の道の展開として徒然草を捉え、その教誡的要因を重視した立場によつて、各段の接続を来意という心理的思想的方法で考えるなど新しい見解をふくめ（檜谷昭彦・有精堂徒然草講座四巻）」た方法で考察する一方、語句註釈には所謂「文法」に注目して、眼字・抑揚・決前生後、に該当する詞を註し、寿命院や貞徳等の説に負いながらも、最も多くは野槌に依拠し、仏典の引証も繁多をきわめて、註の容量を嵩めたが、一説にわたる個所には、自身の見解を明らかに示している。「此の抄は偏する所無きにはあらねども、真摯なる業績の一つとして推すべき物（野村氏・前出書）」としなければならぬ価値を持つ物となっている。続いて寛文五年には『徒然草句解』（高階楊順著）が出る。即ち野槌やなぐさみ草に負う所は見えるが、著書の漢学的素養は本書に価値を付加するとともに曲解もあると指摘

されもする書である。次いで寛文七年に『徒然草文段抄』（北村季吟著）が出るが、季吟は当時の古典注釈学者としては第一流の人物であり、磬斎の『徒然草抄』が「磬斎独自の考察を多く含むのに対して、これ（文段抄）は多分に穩健中正で、それまでの諸注釈の集大成という立場に立つて、さらに一步前進せしめたもの（富倉氏・前出書）」という輝かしい評価を与えられた著であった。『文段抄』は寿命院抄と野槌の説を最も多く採り、師説即ち貞徳説を加え、磬斎説にも及ぶ。その上で私按を出し、彼が他に成した源氏・枕・八代集等の注釈上の蘊蓄をもこの私按に混融化されてあると思われるので注目に価する著述なる事多言を要さぬのである。この時点で、既に先行各研究書の成果を綜合化する機運は成熟化しつつあった。同じ寛文七年に『寂寞草新註』（清水春流著）、続いて寛文九年に『増補鉄槌』（山岡元隣著）と『徒然草諺解』（南部草寿著）が刊行されるが、これに平行していよいよ徒然草研究のもう一つの流れたる論評的研究書も出現してくるようになるのである。南部草寿は京都の儒者ではあるが、『諺解』の凡例で、佛者・儒者・歌学者が各自、己が道へ我田引水して徒然草を説くを非とし、徒然草は三教一致的に理解すべきであり、畢竟、人間常住の思いを破り捨て、無常変易の主旨を觀すべき事を主張している。これはつまり、注釈的研究から論評的研究へ、研究態度の重心の移行を示す発言であるとも考え得るのである。寛文十二年に出た『徒然草嫌評判』（著者未詳）は、感情的批判に満ちた兼好排撃の文章でもって綴られているが、これは前後の順序もなく、当代に於ける徒然草の「好評判」に対する「嫌評判」である。「評判とはあるがむしろ類書の多い徒然草を紛色した文芸作品に入れるべき（富倉氏・前出書）」とされるものである。これに較べてここに翻刻した『摘議』は、論理も整然としており、当代の支配的思想であった朱子学に立脚した儒教的徒然草批判書である。私がさきに本学の『研究論叢』で翻刻した『明汗稿徒然草奥儀抄』（高屋近文著、翻刻は昭和六十一年の第九号から平成二年の第二十三号まで五回分載）もこの系統に属する書である。『摘議』の出た貞享五年には、注釈的研究書を集成した『徒然草諸抄大成』（浅香久敬著）が出ているし、その十一年前には、注釈集成の先駆とし

て『徒然草大全』（延宝五年、高田宗賢著、これは今年度から本学の研究論叢に、別に翻刻分載を始める）が上梓されていた。更に『諸抄大成』から十三年後の元禄十四年には『徒然草集説』（閑寿著）が出たのである。つまり約三十年の間に、徒然草注釈の綜合集大成書たる三大著が出揃った事になるのである。以後、昭和三十七年に『徒然草諸注集成』（田邊爵著）、昭和四十一年に『徒然草解釈大成』（三谷栄一・峯村文人著）が出るまで、この種の刊行は見かけられなくなつたのである。

二、『徒然草摘議』について

『徒然草摘議 上中下 三巻』は、朱子学派の儒者、藤井懶斎らんさいの著にして、貞享五年三月の板行である。貞享五年は九月三十日改元あつて元禄元年となつた歳である。徒然草の中から二十七章段を抽出して、これに論評を加えたものであるが、その抽出目的は、「後ノ徒然草ヲ読ム者ヲシテ、其ノ毒螫どくせきヲ避ルコト有ラシメン（原漢文、漢序）」為に、又「たゞわか子のあやまりよみて志をそこなひ侍るへき（和序）」を痛ましく思う心から、徒然草の思想的害毒を指摘し得る章段を抜き出し、之に儒者的見地から指彈を加えて批判せんが為であつた。その批判の当否は後に触れる事として、その批判ぶりは読者をして爽快ならしめる程であり、近世は言論の自由抑圧の時代というが如き皮相的常識を吹き飛ばす程の豪放自由性を有しているのである。さて『摘議』抽出章段は二十七章段なると前言したが、これはその和文の序にも「今さる章段をつみて愚意にまかせてみたりに議す たまく二十七段あり」とあるから、それでよいのであるが、実際は通行本の、序段と一段・八段と九段・百四段と百五段は、二段を一段にまとめて論評してあるから、単純計算の数値で言えば合計三十段の論評と言えぬこともない。ところで『摘議』の章段数の表示は、通行本の章段数表示とは異つている章段も多いので、次に抽出章段を通行本章段数表示に交換し

て示しておこう。

上巻 序段と第一段。第三段。第四段。第六段。第七段。

中巻 第八段と第九段。第十三段。第三十二段。第三十八段、第四十三段。第四十九段。第五十八段。第五十九段。第七十二段。第七十五段。第九十三段。第九十七段。第一百四段と第一百五段。

下巻 第一百七段。第一百十二段。第一百十七段。第一百二十二段。第一百五十七段。第一百六十五段。第一百九十段。第二十三十八段。第二百四十段。

『摘議』の章段数値は、徒然草伝本諸本のいずれの系統のものとも完全に一致せず、著者懶齋も、徒然草本文の別系統章段数値を併記をしている章段もあるが、これまたどの系統の徒然草か判明し難いのである。部分的には例えば磐斎抄本文の数値と一致するものもあるがすべて一致している訳ではない。従つて『摘議』の用いた徒然草が何系統のものか特定できない。又、章段本文の異同も、正徹本や常縁本、或は烏丸光広本と比考して特定することは困難なようである。懶齋の依拠した徒然草が何本であるかは、今後の精査をまたなければ特定できないが、大胆に言えば、光広本系統に近いものではなからうかと私には思われる。

『徒然草摘議』の板行は貞享五年三月であるが、成稿はその前年貞享四年であろう。この事は漢序の末尾に「歳在強圉單闕坤月之望」とある所から推定したのである。強圉は丁、單闕は卯、貞享五年が戊辰であるから、丁卯はその前年、坤月は私には不明であるが坤を土と考れば十一月ではなからうか、望は十五日、以上の考えが誤つていなければ、漢序の歲月日次は、貞享四年十一月十五日となるので右の如く推定したのである。

次に著者藤井懶齋について付言しよう。懶齋に関しては先哲叢談卷四に詳しく、他に、近世叢語・事実文編・近代名家著述目録にもその伝が見えるので大方はそれ等に譲り、ここには一二付加すべき事柄を添えて略記する。懶齋、名は臧、字は季廉、号は懶齋・玄逸・伊蒿子。又、よもぎが杣人とも称した。『摘議』漢序の理定・叔観の名

号は、子息の名号であろう。姓は藤井であるが、題署に際しては「藤」字を用いる事もあつた。即ち「藤」字の艸冠を省き、「井」字を取去つたのである。筑後の人であるが、初めは、眞名部忠菴（姓は、一に眞鍋・真辺。名は、仲庵に作る）と称し、医術を岡本文治に学び久留米侯に仕えたが、嘗て病人の治療に薬餌を誤り与えて死に至らしむる過失を犯した事があつた。良心の呵責に悩み、耐え得ずして慨然匙を投じて致仕し、京に上つて山崎闇齋の儒門に入り、以後儒業を以つて立つた。晩年祖先の墓に少しでも近いという理由で、洛西鳴瀧村に退居し超然世累を絶つに至る。其の学問は、朱子を崇めて高く性理を談じ、室鳩巢から隱君子の褒揚を得た程であつた。ここで少し脇道に外れるが、一体、徒然草論評書には儒家の手に成るものが若干あり、書名だけ伝わる逸書もあつて、現在の徒然草研究者からは見捨てられた観があるが、その四五を紹介しよう。

況齋岡本保孝の『徒然草攷』一卷、大槻磐溪の『徒然草評』一卷、清水春流の『徒然草新註』四巻並びに『續徒然草』五巻（別名、睡余操筆）、手島堵庵の『徒然草解』一卷、平元梅隣の『つれく草私説』一冊、等がそれぞれあり、『新註』と『私説』以外は、目下は逸書と見做されている。ところで面白いことに、この中、平元梅隣も儒者にして医者であり、大槻磐溪は仙台藩士であるが、その父磐水は杉田玄伯に医学を、前野良澤に蘭学を学んでおる。磐水の季子（第二子とも云う）であつた磐溪は西洋砲術家となるが、幼き日より父の学の影響はうけたであろう。この様に見れば医学的素養の影響で徒然草を論評する儒者が出ていることはまことに面白い現象であると言わねばならぬ。懶齋もまた、医者より転じて儒者となりやがて『摘議』を著すのであるが、その『摘議』で、徒然草百十七段（通行本段数）の「よき友」の中の「二にはくすし」、百二十二段の「人の才能は」の中の「次に医術をならふへし」を取り上げて、兼好の安易な考えに激しく弁駁を加えているが、前述した彼の医者としての悔恨の経歴を考え合わせる時、單なる弁難のための弁難ではなく、実体験に基づく彼の腹中からの立言であり、眞摯なる彼の性格から出ている弁駁であつて、論の当否を超えて吾人に迫り来る気魄と反省とが感ぜられ、これこそが、斯の

如き著述から汲みとるべき真髓であると私は信ずるのである。

懶斎は又『摘議』の中で、僧侶や仏道の一側面を厳しく批判する。例えば通行本の第四段、第六段、第五十八段等々の批判がそれであり、又、忠孝の道から第七段などを批判しているが、これ等はこの『摘議』のみならず彼の別著『閑際筆記』や『本朝孝子傳』等を併読して考察すべきである。懶斎は深く浮屠を疾み緇侶を罵言しているが故である。深草の元政上人等は、孝を以つて聞こえた人物であるが、元政の『釋氏二十四孝』の「本朝和洲栄好」で、大安寺の僧栄好を取り上げたのを以つて、元政は孝道を知らずと批判する論理思考経路等は、『摘議』の中にも見受けられ、彼の著述に通底する信念から発したものと見えよう。

懶斎の兼好論難の対象は、多く僧侶仏道の一側面に対するものであるが、又、好色是認に対する反駁も多い。即ち通行本第三段、第八段と九段、第一百七段等に対する駁論がそれである。これ等は、朱子学派の儒者としての彼の当然の反駁であろうが、その真底は思想的又道義的に未成熟なる若き人々への衷心的忠告から發せられた文言なのである。それは漢序に籠められている彼の心底からも直ちに読み取り得るが、和文の序によれば、更に直接的に我が子に対する訓戒から発している事がわかる。「わか太郎なる子、此ころわつらふ事侍りて、しはらく経業にたゆみ、たゞつれく草をなむ枕のもとにひらきをけり。我これを見てひそかに思ふに、このふみ、詞うるハしく心おかしけれハ、世の人のもて興するもことハりにハ侍れと、初学のともがらにおゐてハ、よまでもあらなんとおもふ所多し。よりにて今さる章段をつみて、愚意にまかせてみたりに議す」。この和序からも、何故に好色・孝道・処世等の章段が多く取り上げられているかという事が、直ちにうなずけよう。

さて又、徒然草には各章段間に、思考的論理的に相矛盾する文言が多くあることは、現代の研究書解説書等でよく取り上げられている問題であり、その矛盾を大局上、止揚せんとする論も、徐々に定説化に向ひつつあるように見受けられるが、『摘議』に於てもこの論理的相互矛盾は見過されることなく厳しく批判されて居り、しかも止揚

するどころか徹底的な論難となつてゐる。通行本の二百三十八段に対する論難は殊に著しい。我々はこういう面からも、徳川期徒然草論評書に遡及して、この問題を見直す必要も又あるかと思ふのである。

次に『徒然草摘議』の簡単な書誌を取り上げる。この書は、國書総目録や三省堂研究史大成によれば、神宮文庫・東京大学・京都大学・駒沢大学に所蔵されていることを知り得るが、古書店の目録類にも滅多に出ないので比較的所蔵も伝本も少ない本ではないかと思う。私は神宮文庫に請願し、その蔵本を閲覧させていただきこの翻刻を作成した。そして平成六年八月八日付、庫収第五〇号の図書翻刻許可をいただいで発表するものである。

神宮文庫本は、上中下三巻を一冊に仕立て、その表紙題箋「徒然草摘議」の下の空白に、「上中下」と手書して、更にその右に三巻をまとめて一冊にしたことを示す「全」を稍大きく手書してある。そして、上巻の巻初に「神宮文庫」の角印と「林崎文庫」の縦長角印が捺印されている。上巻は漢序二丁と和序ならびに本文廿六丁迄、中巻は廿七丁から五十八丁まで、下巻は五十九丁から百二丁まで、となつており、最終の百二丁に刊記と板行者名があつて、横には天明四年甲辰八月吉日奉納／皇太神宮林崎文庫以期不朽／京都勤思堂村井古巖敬義拜」の縦長角印の奉納印が捺印されている。神宮文庫に多い村井敬義の奉納本の一つである。なお三省堂研究史大成の刊記と板行者は誤植されているから留意が肝要である。漢序は一丁八行・一行十五字、本文は一丁十行・一行約二十字、懶齋論評部分は章段文より二字下げに書かれてある。刊記は「貞享五戊辰曆／三月吉日」、板行者は「堀川通六角下ル西坪町／栗山伊右衛門板行」とある。本の大きさは、縦約二十一糎、横約十七糎である。

三、翻刻凡例

1 底本の忠実な翻刻につとめた。即ち漢字・平かな・片カナも底本の通り。但し変体仮名は現行字体に改め、異

体字も植字事情により現行体に改めたものもあるが一々は断わらなかつた。

2 振仮名および清濁も底本の通り。従つて同語の清濁が不統一になつたり、誤りと認められる所もかなりある。

3 句点も底本通り。従つて誤りと認められる所もそのままにしたが一々断わらなかつた。なお句点や読点を施した方が通読しやすいと思われるところは、一字分空白にして句読点にかえた。

4 改行・改頁は底本通りではない。又その指示も行なつていない。

5 底本の文言中に、読解の便を図るために、所々に△大坪注、云々▽として私注を加えた。その部分は底本に無きものである。

6 底本中の文言に、疑念の生じた所も、みだりに改変せず、すべて(ママ)と傍記しておいた。

7 表敬闕字の空白は、(二字空白) 或は^{尊敬闕字}□として示した。又底本に振られていない振仮名は()をもつて区別した。

徒然草摘議 (表紙)

徒然草摘議 序

徒然草者逸民卜部兼好之所筆述而百餘年來盛行于世讀者或謂吾國之魯論也
 是以初學之徒不察其說之良毒相襍而有中使二人暗受病者靡然相傳習矣不亦惜乎嚮
 幸獲一書名曰徒然草摘議未知出於何人之手其書能俾下讀徒然草者知所取捨而
 無上中其毒也用意可謂切矣秘而玩之尚矣有友人來與讀之艷然謂余曰凡
 讀徒然草之輩莫不愛敬兼好若何作摘議者齟齬之甚乎余應之曰蓋亦愛敬之也非
 齟齬之也曰何也曰君子之出言也常恐其有過故有告其過者則喜所以為君子
 也小人反之故雖有過而人不之告所以為小人也今作摘議者雖不下與兼好同而略指徒
 然之瑕疵辨正之者至為切密是待兼好以君子而不以小人也兼好有知奚不
 扞躍于地下一矣明時有姚廣孝者著道餘錄專詆程朱及卒其友張洪焚之曰姚公於我
 厚今死矣無以報之但有焚之道餘錄耳蓋欲使廣孝免於誤後學之罪也非是洪能愛
 其先友乎摘議之作亦惟欲令後之讀徒然草者有上避其毒螫焉則是不一焚之焚也豈
 謂無愛敬於兼好乎哉友人曰好余因次是語之篇端以擬摘議之序歲在強圉單閼一坤月之望

藤井^{理定} 叔觀^滌 筆^ク 于菊潭^{（滌）ニ}

（大坪注、強圉單闕ハ^{ひのとう}丁卯、刊記貞享五戊辰曆三月吉旦カラ推シテ、貞享四年ナリ、又坤月ハ漢和辞典等ニ未載ナレド、坤ハ^{つち}土ナルガ故ニ、十一月歟。十一月十五日ヲ坤月之望ト記シタルニヤ。後考ヲ俟ツ。）

徒然草摘議 上

吉田の兼好は和歌に名を得るのミならず ひろく学まなびおほくしりて 聖賢せいけんの文もこゝらうがゝひえられけれど そのむねと尊たふとびられしハ老佛らうぶつ玄虚げんきょの説なるへし 道おなしからされハ相ためにはからすといへハ(大坪注、論語衛霊公、道不同不相為謀) その作れるつれく草の得失とくしつ わか輩ともからの議ぎすへき所にハあらぬを しゐて今議せむとするは何そや わか太郎なる子 此ころわつらふ事侍てしハらく経業けいげうにたゆミ たゝつれく草をなむ枕のもとにひらきをけり 我これを見てひそかに思ふに このふミ 詞ことばうるハしく心おかしけれハ 世の人のもて興けうするもことハりにハ侍れと 初学しよがくのともがらにおゐてハよまでもあらなんとおもふ所多おほし よりて今さる章段しやうだんをつミて愚意にまかせてみたりに議す たまく二十七段あり 是さらに兼好を是非せひせんとにあらず たゝわか子のあやまりよミて志こころざしをそこなひ侍るへきがいたましかれハ也 能よむ人のためにいはゞ誠まことにいはゆる贅言ぜいげんならんかし

第一段

つれくなるまゝに云々 聲おかしくて拍子とりいたましうする物からげこならぬこそおのこハよけれ 此所こゝを熟讀じゆくどくするに いたましうする物からといひ下戸げとならぬこそといへは 兼好の心もおほくのめにハあらざるへし しからハたゝおほくのまぬぞよきとすぐよかに云へきを それハ詞ことばふつゝかに心やさしからすとや かくのことくいひをけれハ 初心しんしんの人はふかくもたつねず 下戸げとならぬこそといへハ上戸じやうとよきぞとこゝろへ くるしきにたへてのミスぐし 事をやぶり病をおこし 或ハ醉狂すいきやうして人とたゝかひ身をうしなふ事にもいたらん 一言のつるへ誠におそるへし さて下戸げとのよからぬ故ハ何事そや それ酒ハ狂薬きやうやくなり 儒門じゆもんにハ禹うのにくませ給ふよ

りおこりて 世々の聖賢せいけんこれをいましめたまはさるハなし しかれともそれをまもるハあまりにかたくなしといは、兼好ミつからたうとへる佛ハいかゝとけるや 註者又論語ろんごに たゞ酒ハはかりなし乱らんにをよほしたまハすと記するをもつて（大坪注、論語郷黨、肉雖多不使勝食氣 惟酒無量不及亂） こゝの文をあやなせとも 論語の此語に孔子下戸にておハしまさてよかりしといふ心いさゝかなし 酒ハ人のために飲よごひをあはする物なれハ 上戸くはいと會し給ふ時は盃さかづきのめくりもおほし その次はすくなし 下戸なれハいよくすくなし かくのことくその限量をさだめたまハでおのく節せつににあたる事をはかりなしとハいへるなるへし はかりもなくすゝめ給ふにハあらず 乱の字も又おどりはねるにいたるを云にあらす もしハ醉あひそまりて四拜すへき礼儀を三拜にてやむほと的事なり それほととのミたれにたにその會のいたらぬ事を 乱にをよほし給ハすとハいへるなるへし 聖人ミつから酒きこしめして乱にをよひたまハぬは記するにやをよふ たゞ是ハ人と會したまふての御ありさまを記せるならむか これもわかき人々の思ひあやまる事もやあると めつらしげなれと申のふるになん されハ古人に下戸おほし 蕪東坡ハ酒盞せんをのそミ見てもゑゝるといへと（大坪注、事文類聚續集卷之十三、十九丁ニ、蕉葉盃ナル文アリ、即チ、東坡云 吾兄子明 飲酒三蕉葉 吾少時望見酒盞而醉 今亦能三蕉葉矣。 志林 トアリ、一例トシテ示ス） それによりて名をおとせりともきこえず 邨原へいげんといひし人ハことのほかの上戸なりしが 学がくのためにつとめてのまず 是によりてほまれをましぬ（大坪注、事文類聚續集卷之十五、二十五丁。以癡業斷。邨原舊能飲酒 自行八九年 酒不向口 至陳留師韓子 臨歸師友以原不飲酒 陳仲弓范仲博盧子幹 會米肉送原 原曰本能飲 但以荒思癡業斷之 今遠別可盡飲終日不醉。） もとより下戸ならぬ畢卓ひつたくりうれい劉伶りうれいがともから かならず君子にもあらず（大坪注、畢卓ニツイテハ、酒船ナル句文アリ、即チ、畢卓嘗曰 得酒滿百斛船 拍浮酒船中 便足了一生。コノ他、畢卓甕間ナル文モアリ同趣ナリ、マタ劉伶ニツイテハ、誑妻戒酒ナル句文アリソノ一節ヲ抜ケバ、天生劉伶以酒為名 一飲一石五斗鮮醒、云々トアリ） 是によりてこれを見るに下戸なる人さらにあ

しからず 人ミな兼好の詞にまどふ事なかれ

第三段

よろつにいみしくとも色このまさらん男ハいとさうくしく玉のさかつきのそこなき心ちそすへき 露霜にしはたれて所さためすまとひありき 親のいさめ世のそしりをつゝむに心のいとまなく あふさきるさに思ひミたれさるハひとりねかちにまどろむ夜なきこそおかしけれ さりとてひたすらたハれたる方にハあらて女にたやすからす思ハれんこそあらまほしかるへきわさなれ

此段好色かうしよくを人にすゝめたり いと目さまし 註者ことハリていはゞ色をいましむるハ からやまと事ふりたるならひなるを 今この草子にかくいへるハ 人のあやしむへき事ながら こゝが兼好のあたらしき作意なりと 予おもへらく 飲食男女ハ人の大欲存おほくすとなれハ 好めこのといはされとも好むが人の常情じょうせいなり さるゆへにたゞいく度も好むなどのミいひてやむへきを 兼好それハめつらしけなしとて却て好むをよしとす たとへハこゝに人ありて 烏喙うけい董毒とうどく（大坪注、烏喙うけいハ、うかいノ誤読ナラン。毒草とりかぶとノコト。董毒モ菌毒ナランカ、毒きのルビママ）ハくハぬかよきと云ハ常の事なれハめつらしげなしとて すこしハくへとおしゆるかことく 人をそこなふ事言語道断ごんごだうだんなり ○ある註者のいはく かやうにまづ恋路をほめて後によくいましめんためなり 源氏物語一部ぶの趣向しゆかう此段こゝにあり 又俊成卿の哥に 恋せずハ人ハこゝろもなからし物もののあハれもこれよりそしる（大坪注、俊成ノ家集「長秋詠藻」ノ中巻ニ出デタリ。歌仙落書等多クノ書ニ引用サレタル著名歌） 此哥をもてしるへし 已上 予おもへらく 後によくいましめんためとハ第九段の末に大象もよくつななれ秋の鹿かならすよる事を引て おそれつゝしむへきハ此まとひなりといへるなどを思ひあてけるにや されと此段こゝによるつにいミしくとも色このますはハいとさうくしからんとおとし 女にたやすからすおもハれんこそとゆるしたれハ

大象秋鹿しゅうろくのいましめ是をつくのふにたらめや たとへハ刀かたなをとりて人をやふりて かくするハ後によく療治りょうぢして
 えさせんためそと云かごとし 後に天下の妙術しゆつをつくして療治せむよりハ始にやふらさらんそよかるへき 又源
 氏物語一部の趣向此段にありとハ 勸善懲惡くほんせんてうあくのこゝろをしれとや されと源氏物語ハひろけれハ全部を通してそ
 の人々のはしめおハりをよく考かんがへたらましかハ 善におもむき悪をおそるゝ心の出くる事ももしハあらむ 兼
 好の此段詞ことばかぎりあり いつこをか勸善としいつこをか懲惡とせん 又俊成の歌を引て此段の本意とす 歌ハ我
 する所にあらずといへとその意と詞ことばハあらハなり 一首のむね和歌の道にハしかるへし 誠の道理にハあらず
 そもく恋ハ大抵たいわか妻妾さいせうならぬ人をこふる也 これ邪念じや也 邪念にハ必その本心外にうかれて内にハなし 邪
 念やめは本心かへる しかるを俊成恋せずハ心なからん恋せハ心あらんといへる此心何の心をさすや 又物のあ
 ハれをしるハこれ惻隱そくいんの心なり 惻隱の心ハ仁なり 恋に心のうかれたる人いかにして仁をしるや 今俊成のこゝ
 ろををしハかるに 奥山里のしばふるひ人などの 美人びを見てもさのミ心をうかさぬを 物のあはれしらずと
 し 都人の たはれ過るをあはれしと思ハれけるにや それならハあはれしりたるよりもしらぬが却て仁にハ
 近くて真実のあはれをしるへし 誠にかくやさしき歌を仁義惻隱をもつて沙汰するハ よりもつかぬおかしき事
 とおもほす人もおほからめと もはらたゞ書生のために道理によりて沙汰し侍れハその笑ハかへりミス ○又あ
 る註者のいはく まつ恋路をほめて後にいましむるハたとへハ良醫りやういの虫薬をあたへんとてハ さたうをさきへの
 まするがごとし 已上 予おもへらく砂糖さとうをすこしあたへて虫を引うこかして虫薬をしバくのませたらハ虫し
 りそくへし 薬ハすこしにて砂糖しけくハその虫いかゝあらん をよそ此草子二巻の内 好色をかたる事ハしは
 くにして 是をいましむる詞ハすくなし たとへハ久米の仙か心まとひしをハ 外の色ならねハさもあらんと
 ゆるし 荒たる宿の女をとひよる人に伴ともなひてハ うらやましげにそのありさまをかきつらね 人の男女のなげし
 にしりかけて物かたりするを 床しかり 女をかくし置てかよひなから 人にハいつも獨ひとりずミといハれんとこし

らへ くらふの山ももる人しげからんに わりなくかよはん事をおもふ 此外女のなき世なりせハ衣紋あもんも冠かんむりもい
 かにもあれ引つくるふ人も侍らしといひ まよひをあるしとしてかれにしたがふ時 やさしくもおもしろくもお
 ほえんなといへり これ砂糖の過るにあらずや かならず虫の病のおもりて死にいたらんがかなしきなり ○一註
 にはく 男女の道ハ天性なりいかんぞ一向に是をいまん 過て好めるこそあしけれと思へり 已上 予おもへ
 らく 兼好もし此註者の云ところのこととかバ たれかひが事とハせむ 草子の字面じめんまたくさにハあらしこ
 れハ註者別に一義をのぶるなり そのうへ此註者 好の字の義にうとし よき程にこのむを好色の人とハいはす
 もし天性にしたかへる色欲ならハいかばかりめてたからん ○一註にはく ひとすらたハれたる方にハあら
 て女にたやすからずおもハれんこそといへるところ眼まなこをつくへし ひとすら色におほるれは女になれあなどらる
 よきほとなれハ女あなとる心なくて たゝたやすからずおもふなり 已上 予おもへらく 此段の兼好の心
 この註者のいへる所のことくにてハあらし ひとすらたハれたる男をは 色ふかき女ハかへり好まぬものなる故
 に いとまめだちて女にあさからす思ひ入れん事をねかへるのミなり 女ののをれを尊敬そんきやうせん事を求るにハあ
 らす されハその外貌はうをたハれ過さるやうにこしらふるは殊にはなはたしき色このミの必する事なるへし 源氏
 のはゝきゝに さるハいといたく世をはぐかりまめだちたまひけるほとといひ 伊勢物語にも いとまめにじち
 ようにてとかけり 此たくひをミてもしるへし 女のおとこをあなとると うやまふとの沙汰にハあらし
 ○一註にはく 此段に好色をほめてかきたるを 無理に義理をつけて 人の教をしへに取なさんとする故に 却て道
 理にそむく そもく此段ハ撰集せんじふにかならず恋の部あるがごとく たゝ草子の内にあるへき事をそなへたる分也
 兼好恋に心あるにあらず 歌のむしろにして恋の題たいをえたる人ハ心に恋なけれとも恋をよむ也 たゝ是兼好恋
 する人にかかりていへるこゝろなり 已上 予おもへらく この書二卷のあいた聖道をもてとける所あり 佛に
 よりておしゆる旨むねあり 老莊らうじやうをしたひてすゝむる道あり わか國の故實こじつ人ことの得失とくしつをかたりて後の人にかゝみし

めんとするもおほかり 教誨けうかいのためにもうけたる事分明也 あからさまにかけらる草子にはあらし 此註者の説のことく見バこの書の位くらたりなん 兼好に忠ある人にあらず 此段又撰集に恋の部あるかことしといへり 是もうけがたし 撰集に恋の部あるは此部たゝすハそこはくの秀歌しうかもれぬへし いかてやむことをえん 此草子にハ好色をとかでかなハさる道理ひとつもなし 又題をえて歌をよむかことしといへり 題をえて哥よむハその題にひかれての事なれハ 心にあらぬ事もいひ出るハことハり也 此草子に何の題目たいもくありてそれにしたがふや 又兼好心に恋はなけれども恋する人にかハりていへると云も心得かたし 兼好の此書釋迦じやかにかハりて無常をととき 老莊にかはりて玄虚をとく かゝる道人かりにも恋する人にかハりて此段のことき淫醜いんしゆうの語をなすへきわざかハ 兼好ミつからいへり 狂人きやうにんのまねとて大路をはしらハすなハち狂人なり 悪人のまねとて人をころさハ悪人なり 驥きをまなふハ驥のたくひ 舜しんをまなふハ舜の徒となり いつはりても賢けんをまなぶを賢といふへしとなん しかれハいつはりても孔老釈迦のまねをこそすへけれ 何ぞ恋するたハれおのまねをハせんや 註のことはり更にうけかたし ○一註にいはいはく 大抵たいてい草子ハえんにやさしき所あるをよしとす 此段の類誠るいせいにやさしき風情ふうせいにこそあなれ これらミなとり捨すてたらましかば見るにたらさまし 已上 予おもへらく えんにやさしからん草子よまんとならハ 伊勢いせ 式部しきふ 少納言せうなごん 大貳たいにの三位 赤染あかぞめ右衛門ゑもんなどがつくれる文いくらもあり 必しも此書に求むへからず 此書は草子といへばとても 兼好をか心膽しんたんをはきあらハし 三教さんけうによりて一家いっかの道をなし 自行けいた化他けたの益あらん事をおもへり されハ日本の論語ろんごともいへり しかるに好色の諸段しよだんとり捨たたくてなり えんにやさしきとる此註者の見處けんじよおもひやられ侍る 予か此むやうのくりことハ好色の諸段しよだんとり捨たたくてなり えんにやさしきとて世にも興する草子 おほやうミな淫風いんふうを先として学者の手にふるへき物にハあらず かの源氏物語なども勸善懲惡くわんじやうその本志なりとハいへと それまで尋もとむる人もまれなるへけれハたゝ淫蕩いんたうをすゝむるにこそあなれ 昔くわん関白はんぱく秀吉しゆき公伏見の城しやうじつくりをハられて ミつから見めぐり給ふに 障子しやうじに唐たうの玄宗けんそうの貴妃きひを愛あひして笛ふえおしへら

れしさまを繪かける所ありけり 公こうこれハ繪師ゑしのたくミ出してかけるにやと問給ふに さにハ候ハずむかしよりこの圖式づしきありてつかまつるなりとこたふ 公又何ゆへこの圖式ありけるにやと問給ふ 玄宗かく貴妃を愛せられしによりて天が下ミたれたりと云ことを 後代こうたいの人主におぼしらしめむためニ候とこたへ侍けれハ 公うちうなつかせたまふてしばらくありて そこにハさいふことをしれハこそあれ我ごとく物しらするは たゞ玄宗をまねんとこそおもハめ しかじたゞ繪かゝさるかまされるにハ とのたまひしとぞ 誠に殊勝しゆせうの一言そかし まぎれたるいましめハいましめとハならてかへりて人をそこなふ 源氏物語の勸善懲惡是なり ○一註にいはいはく 此段ハ過不及くふまきうをきらひたる心なり よろつにいミしき人も色このまぬハ心のやハラきて道をさとるに遠ければ 本心をもとむるによしなし 其かたにてハ色このまぬがあしきといひ さりとて一向ひたすらたハれたるにハあらてと過たるをおさへたり 誠にたのしめとも姪いんせすかなしむてやふらすとの意なるへし 詩經しきやうのこゝろをよくしらハうたかひあるへからす 且上 予おもへらく 此説せつ 言をたくミにして理を害がいする事殊にはなハたし いはゆる色このまぬハ心のやハラきて道をさとるに遠けれハ 本心をもとむるによしなしとハ是いかなる邪見じやけんそや ひろく聖經賢傳せいけいけんてんを引てことハるに及へからす およそ人ミつから内にかへりミハすなハち此説せつの非ひなる事をしらん 今一藝げいをならハんに 心に常に遊山玩水ゆうざんくわんをのミおもはゞその藝よくならひえてんや いはむや色の人の心をおほらすハ其はなハたしき事山水のたくひにあらす 道の高妙又一藝のえやすきに似ず かりにも色を好ミて道をさとする事をえんや もしたまゝも色を好ミて道をさとり 本心をもとむるにたよりありといはゞ 釋流いかてあなかに姪戒いんかいをたて 聖門いかてつとめて聲色せいしよくをさけん たゞし此人のいはゆる道と本心とハ われそのさすところをしらす 桀紂けつちゆうのみちをさとり 跖躋せきまきやくの心を求むとならハ (大坪注、桀ハ夏、紂ハ殷ノ暴君惡王。跖ハ盜跖、躋ハ莊躋、共ニ中国古代ノ大盜賊。跖躋ハ、せきけうガ正シイ振假名。) 好色まことにたよりよかるへし さらてハ天地のあいだに色を好てさとり入へき道ハあらし 又いはゆる此段 たのしめとも淫せず かなしむてやふら

すとの心なるへしとなん　この聖語又いかゞ心得られけるにや　詩の関雎くわんしゆハ　文王宮中の人君子くんしの配をもとむるに　其えさるほとハかなしミて寤寐ごみ反側はんそくし　得るときハたのしミて琴瑟きんじつ鐘鼓しやうこす　此意を詩となしたるを孔子称したまふ事かくのことし　しかるを文王ミつから后妃こうひをもとめて露霜にしほたれありき　ひたすらたハれたるハあしきとて折をくハくすミ給ひれる事とおもへるにや　誠にいとかたハラいたし　或ハいはん　此語をひくハ其ころにとるにあらず　たゞこれを借て過不及をきらふ意思をあかせりと　是又うけられず　関雎ハ樂たのしみて淫かなしみせず哀かなしみて傷やぶらすとハその哀樂の過へくして過さる事を称して　詩人性情せいじやうの正せいをほめ給なり　はしめより不及をきらふの意なし　淫傷いんしやう二字ミな過るかたにかゝれり　さもあれ好色に過不及をきらふとハ是又何事を云にや　既すてに好といへハ過くハをのつから其中にあり　過ハまことにきらふへし　不及なるをバいかてきらふや　いかやうに色を好めハ不及にてわろきや　たゞかのまよひのひとつやめかたきのミそ　老たるもわかきも智あるもおろかなるもかハる所なければハ　もハラ不及ならんとつとむる人もやゝもすれハ太過すとこそミゆれ　まさしく不及をきらふといひて　天下の男女の淫欲をして過やすからしむるハ何ぞや　此註者又いはく　色このめと云をそしるハ此段のころをこまかに吟味せず　たゞうハへにていへるなり　小智ちハ菩提ぼだいのさまたけと云たくひ誰もあるへき事なり　その道みちのひとによく問あきらめて後とかく云へき也云々　予此語意を案するに　我そその道の人にてつれく草の奥義をきハめたりと自負みづかせらるゝさま也　しからハこゝの過不及をきらふといひ　本心をもとむるによしなしといひ　それに聖語を牽合けんかう附會ふくわいするなどが秘藏ひさうの奥義なるにや　それ諸道の学まことに秘傳ひてん口訣くけつなかるへからずといへと　善悪邪正の大躰たいにおゐてハ愚夫愚婦ぐふぐふ兒童走卒じゆうそうそつもまどハす　是を良知りやうちとす　今こゝに人ありて君に忠するはあしゝ父にハ不孝なるよしととハんに　さためて是奥義あるへしとて人に就てとふものあらめや　色ハ好ミたるかよしと云ハすなハち是君父に不忠不孝なるがよしといへるにひとし　なんそ其道の師しをもとめて善悪をとふにをよハん　然るにいま徒然草秘傳あり口訣ありなといひて　文をまハし辞ことばをまげて　をのか好むかたへ義

理をおとし口にとき筆にあらハして人のこゝろを迷乱すめいらん これ世のくせものなるへし

第四段

後の世の事心に忘れず佛のミちうとからぬ ころにくし

我つらく世の中を見るに 後の世の事心に忘れずしてひが事する人あり 仏の道うとからて欲よくふかき人あり
 是ミな心にくからず たゞひが事せず欲よくふかゝらぬそ心にくき人にハあなる さる人ハたとひ仏にうときや
 うなりとも後世よかるへし ひか事して欲よくふかきは仏にうとからずとも後世あしかるへし 後の世のよしあし
 もおほやうハこなたのありさまにてしらる 仏にハわたくしおハしまさず 我にうとかりしとて君子くんしを地ぢごく
 にいれたまハんや 我にうとからさりしとて小人悪人すべて善所にむかへられんや されハ唐たうの李丹りたんといひし
 人も天堂だうあらハ君子のほらむ地ぢごくあらハ小人いらんとそいへる (大坪注、諸橋博士ノ大漢和辞典ニ記載セル、
 りたんナル人名ハ、李旦・李倓・李聃・李耳・李堪・李湛・李端・李潭、ニテ李丹ハ見エズ。上記右線ハ唐代
 人。参考、螢雪叢説ニ、天堂高而在上、地獄幽而在下、…中略…、為善即天堂、為惡即地獄、天堂地獄不
 在乎他、云々トアリ。唐書等ニテノ後考ヲ俟ツ) 弓ゆみをゐる人手もとたゞしけれハ矢やゆきて的まとにあたらぬハ
 なし 梅尾とがのおの明惠めうゑのいはく 我ハ後世たすからんと云ものにあらず たゞ現世けんぜにまづあるへきやうにてあらん
 と云ものなり 又いはく人ハ經陀羅尼きやうだらにの一卷をもよます焼香せうかう禮拜らいはいの一度いちどをもせずとも 心身しんしん正ただしくしてあるべ
 きやうにだにふるまハゞ 一切さいしよ諸天善神も是をまもり給ひ 願ねがいもおのつからかなふべし むつかしく後世めか
 んよりハ何もせずしてたゞ正しくしてぞあるへき云々 (大坪注、明惠ノ句文ハ、共ニ梅尾明惠上人遺訓ニアリ、
 岩波文庫ノ明惠上人集二〇一・二〇二ページ所収)

第六段

我身のやんことなからんにもまして数ならさらんにも子といふ物なくて有なん 前中書王九条太政大臣花園左大臣
 ミなそうたえんことをねかひ給へり 染殿のおとゝも子孫おはせぬそよく侍る 末のをくれ給へるハわろきことな
 りとそ世継の翁の物語にハいへる 聖徳太子の 御はかをかねてつかせ給ける時も こゝをきれかしこをたて子孫
 あらせしと思ふなり と侍りけるとかや

此段又人のまとひぬへき所なれハいさゝかことはらさることをえす 釈氏人倫を滅して罪を聖門にうる事はめつ
 らしけなけれハもらす 兼好の好める老莊のなかれ 隱逸のともから かならずしも種類をたゝず 老明も子あ
 り 莊周も男子おほけれハおそれおほしとハいへれと 子なかるへしとハとかず 龐徳公（大坪注、後漢末ノ襄
 陽ノ隱者。劉表ノ度々ノ召ニ応ゼズ妻子ヲ伴ツテ鹿門山ニ登リ一生ヲ終フ）陶元亮（大坪注、陶潜即チ陶淵明ノ
 コト。責子ト題スル詩ニ、五男兒有リトイヒ、十六歳ヲ頭ニ、以下五人ノ子ノ不出来ヲ愚痴ツテキル）のとき
 隱士も子おほし こゝにひける前中書王以下の人々の見所おそらくハ老明莊周徳公元亮の輩にハ帰すへからす
 聖徳太子の御事ハ釋門まことに聖人と称ずれと國史を考へ侍るにうたかふへき事なきにあらず 蘇我の馬子が
 崇峻帝を弑せしを 太子これに黨して賊をうち給はず いかでかく不臣にハものし給ふや しかれハ此人とて
 も準則とするにハたらず 兼好ミつから好むかたにひかれ この人々をこゝにあげてをのか詞の證とせり 尤
 これうけられず その家累をかるめんかために 子もたて父祖の祭をたつ罪いつれか是よりおもからん 不孝に
 三あり 後なきを大なりとすところ聖賢ハのたまへれ

第七段

あたし野の露きゆる時なく鳥部山のけふりたちさらてのミ住ハつるならびならはいかに物のあハれもなからん 世

ハ定なきこそいみしけれ 命ある物を見るに人はかりひさしきハなし かけるふの夕をまち夏の蟬の春秋をしらぬもあるそかし つくく〜と一とせをくらすほとたにもこよなうのとけしや あかすおしと思はゞ干とせを過すとも一夜の夢の心ちこそせめ すミはてぬ世に見にくき姿をまちえて何かはせん 命なかけれハ辱おほし なくとも四十にたらぬほとにて死なんこそめやすかるへけれ 其ほとすきぬれハ形ヲはつる心もなくひとにいてましらはんことを思ひ 夕の陽に子孫を愛してさかゆく末を見んまでの命をあらまし ひたすら世をむさほる心のミふかく物の哀もしらす成行なん浅ましき

此段又莊周がよだれをねぶれり されと莊周は命なかけれハ辱おほしといひてやミぬ 年数をかきるまでハなし (大坪注、莊子天地篇ヲ参考スベシ) 兼好人ミな四十にたらでしなん事をねかへり これ何の義そや 瞿曇 (大坪注、釈迦ノコト、釈迦の姓ハ梵語デ、ゴータマ、ソノ音訳。転ジテ仏ノコト。又仏教ノ意トモナレリ) もし四十二たらて入滅せられバ (大坪注、釈迦ハ八十歳ニテ入滅) 未顕眞実にてやまん 老子もしよそちにたらて死せられハ (大坪注、司馬遷ノ史記老子伝デハ百六十歳、或ハ二百余歳ノ寿命トス) 道德経もあらし 仲尼ミつからのたまふ四十にしてまとハずと (大坪注、論語爲政篇、吾十有五而志于学 三十而立 四十而不惑、云々) 孟子ミつからいへらく四十にして心をうこかさずと (大坪注、孟子公孫丑上、我四十不動心、) もし此時にだにをよへてかくれさせ給ハ、後代何をかのべん 遽伯玉五十にして四十九年の非をしる (大坪注、遽伯玉ハ、春秋時代、衛ノ大夫ニシテ名ハ瑗。年五十二ニシテ四十九年ノ非ヲ知り、賢大夫ト称セラレタリ。淮南子原道訓、故遽伯玉年五十而知四十九年非。マタ莊子雜篇則陽、遽伯玉行年六十而六十化 未嘗不始於是之 而卒詘之以非也 未知 今之所謂是之非五十九非也、云々。我国デハ格言的ニ用イラレタリ) 荀卿五十にして始て齊に遊学し其学成て数万言をあらハす (大坪注、荀卿ハ荀況ノ尊称、漢人ハ宣帝ノ諱ヲ避ケ孫卿ト称ス。戦国趙ノ人、錢穆説九十五歳没。著述ニ荀子十二卷三十二篇ヲ伝フ、性悪説ヲ唱フ) 伊川先生ハ七十にして易傳なりぬ (大坪注、

伊川先生ハ程頤テイイノコト、北宋洛陽ノ人ニテ字ハ正叔、著述ハ易伝ノ他ニ經說・伊川文集等アリ、七十三歳歿）
 紫陽夫子ハ四十八にして詩傳シつくり 小学の書 四書の解かい 通鑑綱目カンカウミナ五十をこえて藁カウを脱ダツしぬ（大坪注、紫陽夫子ハ朱熹シュキノ書屋ヲ紫陽書堂ト称セシヨリ朱子ヲイフ。詩傳ハ詩集傳ノコトニテ詩經ノ注釈ナリ。小学の書ハ、朱子ノ門人劉子澄ガ朱子ノ指授ニヨリ纂述シタ小学書六卷ノコトニテ内外二篇ヨリ成ル。四書の解ハ、大学章句・中庸章句・論語集注・孟子集注ノコト。通鑑綱目ハ資治通鑑綱目ノ略称ナリ。） 此人コノくことくくよそちにたらて死せられざるためやすからずや ある註にいはいはく 兼好の此說四十にして悪まれハそれ終んならくのみと 聖人のたまひしに近しと 是誠ケンガウククイに牽合ケンガウククイ附會フイなり 聖人ハ人の時に及て善にうつらん事をすゝめ給へり 四十の後はいきて益なしとのたまふにハあらず ○一註にいはいはく 兼好のこの說聖賢をもていはず たゝ常人につきていへるのみと しかれとも常人なればとて四十にたらてミナ死せば世にいはいはくの人か残らん 其うへわかき比常人とみえて年たけてすくるゝ人なきや たとへハ漢カンの高祖カウソ布衣フイにしてその父なにがし仲がつとめたるにしかずといへりし比 たれか高祖を常人にあらずとおもはん（大坪注、漢高祖ハ、姓ハ劉、字ハ季、劉邦ノコト。父ノ名ハ太公。布衣ハ官位無キ人、平民庶民。史記高祖本紀等ヲ参看スベシ） わか國トヨトミの豊臣秀吉公も 草かりておはせし時 誰か天か下しるへき人とハ見ん 是ほとこそなけれともわかかくて常人と見えて後に 國家のたすけとなりし人世におほし 浮屠トの中にハことに三十にもあまりぬるまで破戒無慙ハカイムサンの凡僧ボンなるか 四十の後道心ふかく自利利他ジリリタの善知識シキとあふがるゝ人いくらかありし これらミナ四十にたらて死せしめん事おしからずや しかのミならず古人ハ四十にして始てつかふ（大坪注、小学内篇、立教第一、四十始仕、方物出謀、発慮トアリ）今ももし古いにしへのことくならハ人ミなつかへすして死して君に忠するの道ハたえむ 人の子十歳にもあまらされハよく父母につかふる事をしらす 父母ミなよそちにたらてしなハ 子いつの程にか父母にハつかへん しからハ世に孝道もたえむ かゝるひがくしき教あるにより世の人つとむへきわさをもつとめす もはら無常をのミいひおも

ひみそぢにもあまりぬれハ 君父をすて妻子になげかせて 世をのかるゝ人すくなからず 又わかくて病ある人もこの詞を口にしまして 艱生（きんせい）よくせではやく死して親に物をおもハするも有りけり つらく思ふに 兼好のこの説たゝ天下晩成（ばんせい）の利器をむなしうするのみにあらず 大きに忠孝の道に害（がい）あり 尤おそるへし をよそ人のよハひ百歳を上寿（じゆう）とし 八十を中寿とし 六十を下寿とす 十五よりものまなふといへとまた世の中思ひしらねハ 文（ふみ）の義理もつまひらかならず 三十なを血氣（けつき）にひかれておもふより外のあやまちもしつへし おほやうよそちうちこそ程こそ意馬心猿（いばしんゑん）の物くるをしさも すこしハしつまりぬへけれハ なミくの資質（ししつ）の人にハ殊に上寿をもえさせて 其徳をなさせたき事にこそあるを 下寿にたにをよばずして死ぬるか いかでめやすきや 兼好又老て姿（すがた）の見にくゝなるをまたじと云もこゝろへがたし 大抵（たいてい）人はおさなきハおさなき形（かたち）よし おさなくて年たけたるありさまハにげなし 老たるハ老たる形よし 老てもしわかうるハしきかほばせあらハ それそことやうにてかへりてみくるしからん 三老五更（かう）姿見にくしとていにしへの明主やしなはずやハありし（大坪注、三老五更ハ、礼記上、文王世子第八、釋奠於先老遂設三老五更羣老之席位、トアリ、即チ周代、老イテ退職シタ官吏ヲ、天子ガ三老五更トシテ父兄ノ礼ヲモツテ待遇シタコトヲイフ。三老ハ三公ノ致仕スルモノ、五更ハ孤卿ノ致仕スルモノ五人ヲ選ブトイフ。又異説アルモ煩ナレバ省略ス。ナホ三老ニハ、上寿―百歳・中寿―九十歳・下寿―八十歳ノ三命ヲイフコトモアリ、前出ノ摘議筆者説ト異ナルコトヲ付記ス） 女などハ老て形もはちぬへし丈夫（じやうぶ）何によりてか恥ん 又白氏の吟（ぎん）を引てゆふべの日に子孫を愛しさかゆく末を見んまでの命をあらましとそしれり ざる老人もしをのか身のためにむさばらハ悪むへし 子孫（しそん）さかしくて家をやおこす おろかにて身をやほほす 今すこしながらへてその行末見んとおもふハ父祖の慈（じ）なり 必しもにくむへき事にあらず 結語（けつご）にひたすら世をむさほる心のミふかく 物のあはれもしらす成行なん浅ましきといへり ざる人誠（まこと）に是あさまし しかれども老て後もしむさばらんかとして よそちにたらて皆死ぬへしとハ あまりなる遠慮（えんりょ）なり たとへハ単（たん）とらせんとて

猫をかふ人に 後にもし猫またにやならん たゞわかき内にうちころし給へとおしゆるがごとし 猫ごとにねこ
 またになるものにもあらず 人ごとに老てむさぼるものにもあらず 註家又論語の これを戒しむること得るに
 あり の聖語をひき出けれど(大坪注、論語季氏、及其老也血氣既衰戒之在得) 聖人ハ人老てハかならず得る
 にけがるとのたまふにもあらず 老人ハ血氣おとるふる故に心むさぼりやすいまじめてむさぼらざれとのミ也
 されバよく警戒してわつかにも理もて氣にかつことをする人ハ おほやうハむさほらす よろつただ人による
 事なるを いかなれハ兼好何のあやめもわかすかばかり偏狭個滞にハとかれけるや よむ人ねがハくハまとハ
 きるゝ事なかれ ○一註にいはいはく よそちの死の事ハをよそ人ハ長命をこのまされ長命ハかゝる損失ありといひ
 て わかき人の死せんはその死を満足させんため也 已上 我おもへらく わかくて死ぬる人は満足もすへし
 しなぬ人の此教によりて身をあやまるをいかゝすへきや 身をあやまるとはいかに 三十にもあまりぬれハ 恩
 ふかき君にそむき老たる親にもつかへず 心にまかせて身をはふらして四十にたらて死なん事をおもふ さりと
 て必しにもやらねハ終にハ不孝不忠不義放埒の人と成て 置所もなかるへし 是身をあやまるにあらずや

徒然草摘議 中

第八段

世の人の心まとハす事色欲にハしかず 人のこゝろはをろかなる物かな 匂ひなとハかりの物なるに しはらく衣裳いしやうにたき物すとしりなから えならぬ匂ひには心ときめきする物なり 久米の仙人の物あらふ女のはきの白きをみて 通をうしなひけんは誠に手あしはたへなどのきよらに肥こゑあふらつきたらんは 外の色ならねハさもあらんかし

第九段

女ハ髪かみのめてたからんこそ人のめたつへかめれ 人のほとこゝろハへなとは 物いひたるけはひにこそ物こしにもしらるれ ことにふれてうちあるさまにも 人の心をまとはし すへて女のうちとけたるいもねす身をおしとも思ひたらず たゆへくもあらぬわさにも よくたへしのふハ たゞ色をおもふかゆへなり まことに愛着あいぢやくの道其根ねふかく源みなもととをし 六塵ろくぢんの樂欲らくよくおほしといへともミな厭離えんりしつへし 其中にたゞかのまとひのひとつやめかたきのミそ老たるもわかきも智あるもをろかなるも かはる所なしと見ゆる されハ女のかミすちをよれる綱つなにハ大象もよくつなかれ 女のはけるあしたにて作れる笛ふえには秋の鹿必よるとそいひつたへ侍る ミつからいましめておそるへくつゝしむへきハ此まとひなり

色ハ内外となく真假しんげとなく まとふ時ハみな邪じやとす まとハさる時ハともに正なり 邪ハ必あるへからす 正ハ必なかるへからす しかるに此草子の色欲をいへる 更に正邪をわかす いましむれハ正をいましめて人倫を癢はせんとし ゆるせハ又邪をゆるして人を淫蕩いんたうならしむ それ天地ハ萬物のもと 夫婦ハ人倫のはしめ 夫婦あ

りて後ならてハ父子もなく君臣もなし　されハ易の上經ハ乾坤にはしめ　下經ハ咸恒にはしめ　詩ハ二南を先とし　禮ハ大昏をつゝしむ（大坪註、周易上ノ上經篇ハ、乾・坤・屯……ト続キ、周易下ノ下經篇ハ、咸・恒・遯……ト続ク。詩經スナハチ詩集傳ハ國風一、小雅二、大雅三、頌四、ト四編アリテ、ソノ國風一ハ、周南一之一・召南一之二・邶一之三……ト続ク、コノ周南ト召南ヲ二南ト云ヒ、転ジテ周公旦ト召公奭ヲモ云フ。大昏ハ天子諸侯ノ婚礼をイフガ、礼記下ニハ、昏義第四十四ナル篇アリテ妻ヲ娶ルノ礼ト義トヲ説キタリ）　此一倫もつとも廢すヘからず　又正しからずハあるヘからず　たゞ聖人のミならず佛といへと在家の人にハ邪淫をいましめて正しきをハゆるせり　今兼好第三段にして露霜にしほたれ所さためすまとひありく人をいミしとし　第八段にてハ久米の脛のしろきを見て心まよひにしを　外の色ならねはさもあらんとゆるしぬ　是邪をゆるして人を淫蕩ならしむるにあらすや　此段に大象秋鹿をもていましむるにいたりてハ又正の禁すましきことをしらするに似たり

第十三段　或ハ十四段とす

ひとり燈のもとに文をひろけて見ぬ世の人を友とするそこよなうなくさむわさなる　文は文選のあハれなる巻く
白氏文集老子のことは南花の篇　此國のはかせともものかける物もいにしへのハ哀なることおほかり

司馬温公の書をよめるハ聖人を師とし群賢を友とす　その人大宋の参政として　澤ハ天下にかふむり名ハ百世にたかし　誠にやむことなき君子なりかし（大坪注、司馬温公の書トハ、司馬光ノ資治通鑑ナリ。）　兼好の書をよめるハ老莊を師としもろくの文人を友とす　その人わか□朝の一閑人にしてこの民に寸補なく　身のたつきたにあらて　よねとあしとを歌よみて人にこひたり　誠に徳として称すへき事なき人なりかし　窮達をもて人を毀誉すへきにはハあらねと　術ハ又つゝしますハあるヘからず　文よむ人　ねかはくハ温公にならひて兼好をまねふことなかれ

第三十三段 一本世一段とす

九月廿日の比 ある人にさそハれて奉りて 明るまで月見ありくこと侍しに おほしいつる所ありてあないせさせ
ていり給ひぬ あれたる庭の露しけきに わさとならぬ匂ひしめやかにうちかほりて しのひたるけはひいと物あ
はれなり よきほとにて出給ひぬれと なをことさまのゆふにおほえて 物のかくれよりしはし見るたるに つま
とを今すこしをしあけて月ミるけしきなり やかてかけこもらましかハ口をしからまし 跡までみるひとありとハ
いかてかしらん かやうの事ハたゞ朝夕の心つかひによるへし 其人ほとなくうせにけりときゞ侍りし

此段の人にとハれし人 やかてかけこもらさりしハ誠にやさし 兼好物のかくれより見るたるはよからす もし
其人月をも見すかけこもるか 又こと事にて浅ましきさまの見えきこえたらましかバ をのか興をうしなへる
のミならず其人をも捨るなり されハ古人ハ 人の陰私をうかゞふことをふかくいましめられたり 車にありて
もかへりミ轂こくをすきすとさへいへり（大坪注、礼記曲礼上ニ、國君不乘奇車……（中略）……式視馬尾、顧不過
轂、トアル。國王ハ不正ノ車ニ乗ラズ……軾ニヨリテ礼スル時ハ馬尾ノトコロヲ見、顧ル時ハ轂マデニ止メテソ
レヨリ見過ギナイ、トイフ意。轂ハ、こしきノコトデ車軸ガ挿入サレ、車ノ輻ガ集マリタル部分ヲイフ。）
兼好いかて物のかくれよりハ見るや 道をまなふ人のかりにもすべきわさにハあらず

第三十八段 一本世九段とす

名利につかハれてしつかなるいとまなく一生をくるしむるこそをろかなれ 財たからおほければ身をまもるにまとし 害がい
をかひ煩わづらひをまねくなかたち也 身の後にハ金かねをして北斗ほくとをさゞふとも人のためにぞわつらハるへき をろかなる人
の目をよろこはしむるたのしみ又あちきなし 大なる車こえたる馬金玉まきんぎよくのかさりも心あらん人ハうたてをろかなり

とそみるへき 金ハ山にすて玉ハ^{ふち}淵になくへし 利にまとふハすくれてをろかなる人なり うつもれぬ名をなかき世に残さんこそあらまほしかるへけれ 位^{くらゐ}たかくやんことなきをしもすくれたる人とやは云へき をろかにつたなき人も家に生れ時にあへは高き位にのほりおこりをきハむるもあり いミしかりし賢人^{けんじん}聖人^{せいじん}ミづからいやしき位にをり時にあハすしてやミぬる又おほし ひとへにたかきつかさ位をのそむも次にをろか也 智恵^{ちゑ}と心とこそ世にすくれたるほまれも残さまほしきを つらく思へはほまれを愛^{あい}するハ人のきよをよろこふ也 ほむる人そしる人とも世にとまらず つたへきかん人又ミすミやかにさるへし 誰をかはち誰にかしられんことをねかはん ほまれハ又そしりの本なり 身の後の名残りてさらに益^{あき}なし 是をねかふも次にをろか也 たししるて智をもとめ賢をねかふ人のためにいは 智恵出てはいつハリあり 才能ハ煩惱^{ぼんのう}の増長せるなり つたへてき^{まな}学^{まな}ひてしるはハまことの智にあらず いかなるをか智といふへき 不可は一條也 いかなるをか善といふ まことの人ハ智もなく徳^{とく}もなく功^{こう}もなく名もなし 誰かしりたれかつたへん 是徳をかくし愚^ぐをまもるにハあらず 本より賢愚^{けんぐ}得失のさかひにをらされハなり まよひの心もちて名利^{みやうり}の要^{よう}をもとむるにかくのこし 萬事^{まんにひ}ハ皆非なり いふにたらずねかふにたらず

此段名利につかはるゝをにくミ 財^{さい}おほきをいとひ 智恵と心とこそ世にすくれたるほまれも残さまほしきなどいへるあたりいとよし されと又例の老莊^{らうしやう}に説^{とま}おとしたれは 餘ハミな相ともに議するにたらず 唯なんちはなんちせよ我ハ我をせんといひてやまむのみミ たゞし其財を論するあたり痛快^{つうくわい}に過たれば初学のために一言^{げん}せんか それ富貴ハ天にありといへは(大坪注、論語顔淵ニ、子夏曰、……死生有命、富貴在天)むさぼらずしてをのつから富貴を得る人もいかてなからん もしさるひとのためにいは 驕^{おごる}ことなかれ 礼^{れい}このむへし あつく施^{ほどこ}すへしなとこそおしゆへけれ 必しも金を山にすて玉を^{ふち}淵になけしむへき道理はなし 君子はたゝむさほりてうる富貴 もとめてすゝむ位階^{いゐかゐ} さかふて入る財寶^{さいぼう}をこそいたくいましめ給ふなれ 名も又しかり かりにも

ねかふ心あらはうるさし　その實ありて名をのつから是にしたがハ、しるていとふへきにあらず　聖人名の称せられざるをにくミ給ふも実なき事をにくミたまふ也　なんそたゝ実なくて名をねかふはおろかなりといはすして　すへて名を益なしとハ云や　智恵も又しかり　知をきハめ意を誠にせハ何のいつハリかあらむ　聖賢のふミよむともから　是に眩惑せらるゝ事なかれ

第四十三段　一本四十四段

春の暮つかたのとやかにえんなる空に　いやしからぬ家のおくふかく木たち物ふりて　庭にちりしほれたる花ミすくしかたきを　さしいりてみれば　南面のかうしミなおろしてさひしけなるに　東にむきてつまとのよきほとにあきたる　みすのやふれよりミれハ　かたちきよけなるおとこの　年廿ハかりにて　うちとけたれと心にくゝのとやかなるさまして　机のうへに文をくりひろけて見たり　いかなる人なりけんたつねきかまほし

いやしからぬ家の庭に　ちりしほれたる花見すくしがたきを　さし入てみるまでハさもありぬへし　南面のかうしミなおろしたらハ　さいはい其所にて静に花見てさりぬへきを　ことさらに東にめぐりて妻戸のあきたるを求いでゝ　みすのやぶれより人をうかかひ見る　是はたして何の用そや　かゝる風情をミつからハ優にやさしく人の及はぬ所と思へるさまなれと　道しれる人ハおかしかりぬへし　註者のいはく　わかき人のならひ　心物にうこきやすきに　花のころ花をもめてずのどやかなるさまして　学問しるたるを兼好ふかく感したる也

已上　予おもへらく　此段もし物にうはゝれずして学問するを感じたりといはゝ　次の段の笛吹たる男と　御堂の廊にかよふ女房の追風ようい　人目なき山里ともいはずと感したるをハ　なにといはむや　必これ註者の意のことくにてハあらし　兼好ハたゞやさしきさまを感じたり　其うへ此男のくりひろげて見るたりける文又しりかたし　ちかくよりもよみたらは興さむる事にやあらん　人の善をほむるハよき事に侍れと　入たちて

もしらぬわたりの事を 我そよく物に心をはつくれとて とかくおもひめぐらす人ハ 聖海上人が丹波のいづもにて 獅子こまいぬのたちやうを見てなかしたりし感涙かならすある物にこそ（大坪注、徒然草二百三十六段参看）

第五十段（大坪注、諸書四十九段。磐斎抄五十段）

老来りて始て道を行せんとなつことなかれ ふるき塚おほくハ是少年の人也 はからざるに病をうけてたちまちに 此世をさらんとする時にこそ はしめて過ぬるかたのあやまれることハしらるなれ あやまりといふは他のことに あらず 速にすへき事をゆるくし ゆるくすへきことをいそきて過にしことのくやしきなり 其時くゆともかひあらんや 人ハたゝ無常の身にせまりぬることを心にひしとかけて つかのまもわするましき也 さらハなとか此世のにこりもうすく 仏道をつとむる心もまめやかならさらん 昔ありける聖ハ 人來りて自他の要事をいふ時 答ていはく 今火急の事ありて 既に朝夕にせまれり とて耳をふたきて念仏してつるに往生をとけけりと 禪林の十因に侍り 心戒といひける聖ハ あまりに此世のかりそめなることを思ひて しつかについてけることたになく つねハうすくまりてのミそ有ける

此段無常の身にせまりぬることを心にひしとかけて つかのまも忘るましき也と云は 兼好のみちにハさもありぬへし 禪林十因にみえたるひしりをひけるハはなはだし 竊にはかるに 釈門の自行化他ハ儒者の明德新民のことし（大坪注、大学、經一章ニ、大学之道 在明明德 在親民 在止於至善トアリ） 今もし自他の要事にこたくく耳をふさぎて たゝ身ひとつの後世やすからんとおもはゝ 是かの一箇の利心にして化他の念なきなり 儒門にいやしむへきのミならず佛もよしとハ見給ふましくや

第五十九段 一本六十段(大坪注、諸書五十八段、磐斎抄五十九段)

道心あらハ住所にしもよろし (いへに) 家(マ)にあり人にましはるとも後世(こせ)をねかはんにかたかるへきかハといふは さらに後世しらぬ人なり けにハ此世をはかなミ かならず生死(しやうじ)をいはんと思ハんに 何の興(けう)ありてか朝夕君につかへ家をかへりみるいとなミのいさましからん 心は縁(えん)にひかれてうつるものなれば 静(しづか)ならてハ道ハ行しかたし 其うつは物むかしの人に及はす 山林(さんりん)に入ても餓(うへ)をたすけ嵐をふせくよすかなくてはあらぬわさなれば をのつから世をむさほるに似たる事もたよりにふれハなとかなからん されはとてそむけるかひなし さハかりならば なしかハすてし なといはんハ無下の事なり さすかに一度(たひ)みちに入て世をいとはん人 たとひ望(のぞ)ありとも いきほひある人の 貪欲(とんよく)おほきになるへからず 紙の衾あさの衣 一鉢(はつ)のまふけあかさのあつ物 いくはくか人のついへをなさん もとむる所はやすく其心ハやくたりぬへし 形(かたち)にはつるところもあれば さはいへと悪にハうとく善にはちかつくことのミそおほき (ママ) 人とむまれたらんしるしにハ いかにもして世をのかれん事こそあらまほしけれ ひとへにむさほる事をつとめてほたいにをもむかさらんは よろつのちくるいにもかはる所あるましくや

此段兼好の道にハさもあるへし 我より是をいはず其ことば咎(とが)なくハあらす 生死をいでんとおもハんに何の興ありてか朝夕君につかへ家をかへりミるいとなミのいさましからんといへり 是君父の身の 我が身よりももきと云事をしらぬなり わか身よりもき君の身をすて 我身よりもき父の身をかへりミすして たゞ我身の生死をいてんとミつとむ もつとも名教(めいけう)のつミ人ならずや たとひ死(し)此生(しやうじ)彼のくるしミにしつミ万劫(まんけつ)うかふ事なくとも 君父をすてゞ我身やすからんとハ義をしる人ハ思ふへからす 又人とむまれたらんしるしにハ いかにもして世をのかれん事こそあらまほしけれといへるは はなハだしき偏見なり 人とむまれたるしるし いかで世をのかるゝ一挙(きん)にハあらん 聖賢の道ハしはらく置ぬ 釈門のともからといへと猶世にありて上ハ王公大人より下か下にいたるまでに 佛の道ときまかせてひろく教をなさむと思ふもあり 或ハ東南西北に行めぐり施(ほどこ)し

を人にこひて 仏像幡蓋ぶつざうばんがいをつくり殿堂坊舎たうどうぼうしゃを修補しゆほせんとつとむるもあり 或ハ道をさとりて宗風をおこし法燈ほうとうを
 もかゝげそへんかために 江南湖北徧參くわんこくへんさんしてやまさるもあるへし これらミな人とむまれたるしるしなしとする
 か まして釈氏ならぬ人ハ世にありて世のわざをつとめてこそ 國もおさまり天下もやすかるへけれ 賢者けんしゃのう能者
 ミな世をのかれバ世ハたれありてかおさめん 人たれか山里の 世のうきよりも住よき事をしらすらむ 我なす
 へき事をなさてしめて世のうきをのかるゝハ 罪を天に得るところなり されハぞ つとめて世にハふるを兼好
 われのミしれるやうに世をのかれぬをもとかしと見る 却てこれ見解けんげのひきゝなり そのうへのがれてのがれう
 るもあるべし のかれてかへりてそこぬるもあるへし むかしなにかしの阿闍梨あしやりこうぜん公尊といひしは 山寺に住て年
 ころおこなひすましけるか猶山ふかく入てたゝひとりありて菩提ぼだいをいのらんとて 寺を出て小原の奥に庵をむす
 ひて寂寞しやくまくとしてありけり 半年はかり過てあまりに静なるまゝにこしかた行末何となくおもひつゝくるほとに
 女犯肉食にょはんにくじきの念ねんおこりていと浅ましかりし事ふるきふミに見えたり (大坪注、公尊ノ説話未考、後考ヲ俟ツ。一種
 ノ過去帳トモ云フベキ常楽記ノ曆応四年閏四月八日條ニ、公尊二位法印他界ト見エタルモ、名称ノ偶合ノミナラ
 ン) 仏もよのつねの行者ハ四人よりすくなくおれる事をは制したまひしに 首猛精進ゆうもうしやうじんの頭陀門づだもんの行者にもあ
 らで ひたすら寂靜しやくじやうをもとめてそこねぬる事のおしさよとそ 時の人ハいひけるとなん (大坪注、例ヘバ正法眼
 藏隨聞記六ノ二段ニ、世間ノ人ニマジハラズ、己ガ家バカリニテ生長シタル人ハ、心ノマヽニフルマイ、ヲノレ
 ガ心ヲ先キトシテ、人目ヲ不知、人ノ心ヲカネザル人、必ズアシキ也、等トアリ) 是を見ても兼好の論のあま
 りに一槩がいなる事をするへし されと我も一槩がいにハ論ずへからす 齡よひひかたぶき世につとむへきわさもなく 家に
 老幼をもやしなハぬ人ならハ 心にまかせて 遁世とんせいもすへし 遁世益なきにハあらず ○一註におもへらく 儒
 者ミな釈氏の遁世を忠孝にそむくといへと 仏三十成道の後 寶積經ほやくきやうをときて 父淨飯大王じやうはんたいわうならひに七万の釈氏
 の親屬に ことゝく無生忍むじやうにんを得せしめ給ふ 孝これより大なるあらむや (大坪注、仏三十成道トアレド、釈

迦大悟成道ハ三十五歳、宝積經ハ大宝積經ノ略称。菩薩ノ修行ヤ授記ニ関スル四十九ノ独立經典ヲ集メテ宝ノ集積ニナゾラヘタリ。無生忍トハ、一切ノ生滅ヲ超越シタ空觀ノ認識ヲイフ。又官をやめて遁世する人 君にハつかふまつらされともわか道成就して 國家を祝願し在位保命を祈る これ忠にあらずや 已上 釈迦の御事はしハらく置ぬ 末徒をもつて是をいはゞ 仏のまねとて父母をすて家をいて、道をならふとすれと 十とせはたとせか程には成道もしかたけれハ 其あいたに父も母もおほやう死して 一日の報恩だになし たまゝ親のいける世に我道成就せりとおもへるもあれと そのうつハもの釈迦に及バで寶積經もえとかざれば 無生法忍を得せしめん事もおほつかなし われより是をミレハ たゝそのまゝ家にありて孝をつくせる人にハしかず さて又君恩ふかき人 其君を捨て出家せるハ 道成就せハ國家を祝願して報恩にそなへんと思ふとなん 昔ありける人敵とたゝかハんとせしに その従者とをくさりて 日比へて帰ていはく 君もしたゝかひにまけ給ハゝそれをむくるんために兵法習ひにまかりしとなん 後のむくるに比類なき働せんよりハ 先はしめのたゝかひの時をたすけたらんそよかるへき 人の臣たるものさしあたりたる奉公はせて 後に國家を祈祷せんとて 君を捨て出家するハ此従者が事に似侍らすや 況や又その法力 とぶ鳥をいのりもおとすまじけれハ 祝願の報恩もおほつかなし 我より是をミレハたゝそのまゝ國にありて忠をつくせる人にハしかす ○一註にいはく 羅山子此段におるていはく 兼好か云ところの道は何事をさすや 君臣父子夫婦兄弟朋友の外に道ハあらすと 是天下の公論にあらず 堯舜の道あり 老莊の道あり 釈迦のミちあり 此三道ハ水火土のことし 天下になくてハあるへからず 已上 (大坪注、ココハ、林羅山ノ野槌ヲ引キテ、浅香久敬ガ諸抄大成ニ述ベタル論ナリ) 予おもへらく 羅山子の論をそしれる註者三教の本にくらき歟 それ堯舜の道ハ天地はしめてひらけしよりその間に流行して一日のやむことなし 人須叟もこれによらされハたゝず 老莊の道は周の簡王より前にハなし 釈迦のみちハもろこしハ後漢の時そ始てわたれる しかるに唐虞三代の泰平ハ簡王より後の世の及ふところにあらず もし老莊と

儒仏とまことに水火土のことにて そのミチ一をもかくへからさる物ならハ 唐虞三代いかにしてさる泰平を
 Haitaせるや 我^{（魯論）}朝も又欽明天皇よりこそ仏と云ものハあれそれより前いかにしてあまつひつぎうけたへさ
 せ給ひしや ミな道あるによりて也 その道はすなハち羅山のいはゆる道なり 老仏二教のミチハ^{（手垢）}ちだハず
 しかれハ羅山のことばいかて公論にあらざらん それ人飢^{（餓）}てはかならず火食す 渴^{（渴）}してハかならず水飲^{（飲）}す 土ハ
 萬物を生す 三の物誠に一日もかくへからす しかるに三教の内の老仏二教ハかけても世のおさまる事 右に云
 ことくなれハ註者のたとへハあひかたくや 輟耕録^{（てつかうろく）}といふ文にいへるは 積^{（積）}ハ黄金^{（金）}のことし 老ハ白璧^{（璧）}のことし
 儒ハ五穀^{（穀）}のことし 黄金白璧ハなけれどもさまたけなし 五穀ハ世におゐて一日もかくへからすと 是ぞ大や
 うたとへ得たる（大坪注、輟耕録ハ、明ノ陶宗儀ノ撰、三十卷、元代ノ法制及ビ至正年間ノ東南ノ兵乱ヲ詳記シ、
 又、訓詁書画戯曲ノ考証モアリ、和刻本デハ承応元年中野是誰板本、須磨勘兵衛後印本、文政六年後印本アリ、
 書名モ輟耕録。但シ序文ニ耕字ヲ用ヒシ所モアリ。輟耕録第五卷三教ニ、上問曰 三教何者為貴 對曰 釋如黃
 金 道如白璧 儒如五穀 上曰 若然則儒賤邪 對曰 黄金白璧無亦何妨 五穀於世豈可一日闕哉 上大説。）

第六十段 一本六十二段（大坪注、諸書五十九段、警齋抄六十段）

大事を思ひたゝん人は さりかたく心にかゝらんことのほいとけすして さなからすつへき也 しハし此事はてゝ
 おなしくハ後事さたしをき しかくのこと人の嘲^{（あざけり）}やあらん行末難なくしたゝめまふけて 年ころもあれはこそあ
 れ其ことまたんほとあらし 物さハかしからぬやうになと思ハんにハ えさらぬことのミいとゝかさなりてことの
 つくるかきりもなく 思ひ立日もあるへからす おほやう人をみるにすこし心あるきハ、皆此あらましにてそ一期^{（一）}
 はすくめる ちかき火なとにくる人ハしハしとやいふ 身をたすけんとすれハ恥をもかへり見す財をもすてゝの
 かれさるそかし 命は人をまつ物かハ 無常^{（むじやう）}のきたることは水火のせむるよりも速^{（すみやか）}にのかれかたき物を 其時老た

る親いときなき子 君の恩人のなさけ 捨かたしとてすてさらんや

此段ことはをきハめて遁世とんせいをすゝめて痛快つうくわいに過たり ちかき火災さいにハ誠によるつの財寶さいぼう打すてゝにくべし さりとて主君や父母を捨てにくへきか 恥ちをもちへりミスといへれと あかはだかにて白晝ちちうに大路をはしりても身をたすくへきや 此たとへ尤義ゆうぎを害がいすへし それ無常むじやうの遁とんかたきはもとより定さだまれることハりにて今更おとろくへきにあらず 死する時ハ死すへし いけるかぎりハ忠孝おこたるへからず しかるをもし先だちて死したらハ君父の恩おんをも捨へきほとに かねてすてよとおしゆるハ何そや 人の臣子たとひ君父に先たちて死する物に定りたりとも 殊ことにふかく日をおしミてこそつかふまつるべけれ いかてともにいける世にしハしも君父をは捨まいらせん 兼好の此をしへ たとへハ富る人を見て 汝まづもし貧まつしくなりたらハ家もたからも身にそふへからず その時を待えて何かせん 家財けざいミな只今より捨てさるへしと云かことし ちかころ無理の所望なるへし たからハ君父にたくらふれハ誠に鴻毛こうもうよりもかろし それたに捨へき時いたらでハ捨かたきにあらずや 儒仏のたがひめ常に此所こゝにあれば事あたらしく辨べんすへきにもあらねと 初学まなぶの人の惑まどひもやとくといさゝかことはをつるやし侍る ○一註にいはいはく かくいへはとでもわかき人などハ行末を能はからひて思ひたつべし 花山の院十九にて御遁世なりしか後に御道心ミたれさせ給ひ 御後悔ありけるよし栄花物語に見えたり 巳上 (大坪注、ココハ文段抄ガ野槌ノ説ヲ引キテ述ベタル論ナリ。花山院ノ該当記事、栄花物語卷二・卷四ニ見ユ) 此註者本文の痛快に過たる所をハおさへたれと行末をよくはかれといふハあたらず 只まづ世をのかるゝは義か不義かと思ひはかるへし もし不義におちいるましくハ行末をハはからずして遁世すとも可なり とかくたゞ我ためを先たてゝ君父を忘れて義を害するか悲しき也 花山院の御事後に御道心ミたれさせ給ふにハあらず そのかミ悲華經ひけわぎやうの文にまとハされさせ給ひし御心すこしとりなをさせ給ふなるべし そのときもし聖人の道に帰したまはゝ御晩節おんばんせつハいミしかるべきを (大坪注、悲華經の文トハ、野槌ニ、妻子珍宝及王位 臨命終時不隨者ヲ示セリ。大方等大集經第十四

虚空藏菩薩所問品ニモ、不隨者ヲ無隨者トシテ出ヅ。古今著聞集卷十三哀傷・十訓抄第六等ニモ見エタリ。

第七十三段 (大坪注、諸書七十二段、磐齋抄七十三段)

いやしけなる者 むたるあたりに調度のおほき 硯に筆のおほき 持佛堂に仏のおほき 前裁に石草木のおほき
家のうちに子孫のおほき 人にあひて詞のおほき 願文に作善おほく書のせたる おほくてみくるしからぬハ文車
の文 塵塚のちり

家の内に子孫のおほきを見るしとおもへるハ 兼好れいの本病の譚言なれハとかむるにたらず たゞしなべて
の人とかたらハ南唐の陳褒八十世までにあつまりすみ 長幼七百人にをよひ 宋の李明遠が家ハ二百餘口ぞあり
ける 此たぐひ尤おほし (大坪注、南唐の陳褒云々ハ、小学外篇善行第六明倫ニ、江州陳氏宗族七百口 每食設
廣席 長幼以次坐而共食之 有畜大百餘共一牢食 一犬不至諸犬為之不食、トアリ、中村惕齋ノ小学示蒙句解ハ
之ヲ釈キテ、江州ハ國ノ名、陳氏名ハ褒、五代ノ時ノ南唐ノ人ナリ、口トハ、人ノクチカズヲ云、陳褒先祖ヨリ
同居スルコト十代ニシテ、宗族ノ數七百人ニ及ベリ云々ト述義セリ。宋の李明遠が家云々ハ、古今事文類聚後集
卷之一、人倫部宗族ニ、李昉家子孫數世 至二百餘口 猶同居共爨 田園邸舍所收 及有官者俸祿 皆聚之一庫
計口日給餉、トアリ。李昉トハ即チ李明遠ノコトニテ、現在ノ河北省、昔ノ深州饒陽ノ人ニテ、五代、漢ノ乾
祐年間ノ進士タリ、文集五十卷アリ、マタ奉勅シテ太平御覽・太平広記・文苑英華ヲ撰セリ。次ニ此たぐひ尤お
ほしトハ、事文類聚ノ宗族ノ項ニ、上記以外ニモ多ク載セタレバ参看ノコト) 君子ハミな是をいミしと思へり
もし陳褒明遠がときは聖人にてあらざれば のりとするにたらずといはゞ 堯ハ九男二女おはしまし 文
王ハ百子となん申つたへたり (大坪注、史記五帝本紀帝舜ニ、三十而帝堯問可用者 四嶽咸薦虞舜曰可 於是堯
乃以二女妻舜 以觀其内 使九男與處 以觀其外、トアリテ堯ニ、九男二女アリシ事ヲ伝フ。文王百子未考、思

フニ、詩經大雅三、文王之什・三之一ノ、文王孫子、本子百世ノ誤解ナル歟）是ミな見ぐるしからんや ある

註者のいはく 世の人の子をおほく持てにぎハしとおもへれと その子孫あしきときハ先祖の名までくだせハかくハ云なり 已上 この説たとへバ農民のうじんにあひて田をおほくつくるハ家のにぎハひなれど そのなりはひもしあしくハいかゞせん たゞつくる事なかれとをしゆるがごとし 農民のうじんもしなりハひあしからんとて田つくりは農業のうけうは絶ん 人の家もしむまれつきあしからんかとて子もたずハ人種ハたえん 註者の意あまりに用心すぎたり もしおほきをきらひて すくなくもてる子あしくむまれつきたらハ それそ誠に先祖の名をくだすべし おほき中にハすぐるゝ子もある物なれバ おほく持て先祖の名をあぐる事もいかでなからん 人は是にまどハさるゝ事なかれ 大抵たいてい此書の此段の類ミな家累るいをかるめて をのが身に簡便かんべんならん事を求るの私心よりとけり さるゆへ論辨偏狭へんけうにして大に聖賢の語意に遠し 眼をつくべし

第七十六段 （大坪注、諸書七十五段、磬齋抄七十六段）

つれくゝわぶる人ハいかなる心ならん まぎるゝかたなくたゝひとりあるのミこそよけれ 世にしたがへは心こころの外ほかの塵ちりにうばゝれてまどひやすく 人にまじハれば 詞 よそのやううまご（大坪注、聞ノ草体ヲ、やトウノ平カナニ字ニ見誤リタルナルベシ）にしたがひて さながら心にあらず 人にたハふれうまごあらそひ 一度たひハうらミ一度ハよろこぶ事ことさだまれることなし 分別ぶんべつみたりにおこりて得失とくしつやむ時なし まとひの上うへにゑゝり 酔よめのうちうちに夢をなす かしりていそがはしくほれてわすれたる事人ミなかくのごとし いまだ誠まことの道をしらずとも えむをはなれて身を閑しづかにし 事に預あづからずして心をやすくせんこそ しはらくたのしむともいひつへけれ 生活しやうくわつじんじ人事じんじ 伎能きのう学問がくもん等の諸縁しよをやめよとこそ摩訶止観まかしくはんにも侍れ

此段僧徒そうと或ハ隱遁閑居いんとんかんきよの人のためにとかは誠に可なり なべて人はかくのごとくなれといはゞ此理なし もし僧

にもあらず隠者にもあらずぬ人が　さらばとて俄に生活をやめたならばかならず家をやぶらん　人事やめたらバ郷黨にもありえじ　家をやぶり里をも追出されて　伎能学問もなきいたづらものとなりなバいかむ　さハありとも諸縁やめてんや　是によりてひそかにわが道の教をおもふに諸縁のいとほしきは應接あたられればなり　應接あたらざるは道理あきらかならざればなり　学びて道理あきらかにしてよく物に順應せバ　何のわづらハしき事かあらん　兼好いかでこゝにくらくて力にまかせて諸縁をやむるや

第九十四段　（大坪注、諸書九十三段、磐齋抄九十四段）

牛をうるものあり　買人明日其あたひをやりて牛をとらんといふ　夜のまに牛死ぬ　かはんとする人に利あり　うらんとする人に損有とかたる人あり　是をきゝてかたへなるものゝ云く　牛の主誠に損ありといへとも　また大なる利あり　其故ハ生あるもの死のちかきことをしらすること牛既にしるなり　人又おなし（はかるざるに牛は死シヲ脱ス）　はからざるに主は存せり　一日の命万金よりもおもし　牛のあたひ鵝毛よりも軽し　萬金をえて一錢をうしなはん人　損ありといふへからすといふに　皆人嘲て　其理ハ牛のぬしにかきるへからすといふ　又云　されは人死をにくまは生を愛すへし　存命の悦日々にたのしまさらんや　をろかななる人　此樂をわすれて　いたつかはしく外のたのしひをもとめ　此財をわすれてあやうく他の財をむさほるにハ志ミつことなし　いけるあひた生をたのしますして　死に臨て死を恐はし　此ことハリあるへからす　人皆生をたのしまするは死をおそれさるゆへなり　死をおそれさるにハあらず死のちかき事をわするゝなり　もし又生死の相にあつからすといはゝ　実のことハリをえたりといふへしといふに　人いよくあさける

ひそかに思ふに　生死ハ昼夜晦明のごとし　出ていらざる日あらめや　ミちてかけざる月あらめや　たゞ是人の常にしあれハ　生もかならずしも日々にたのしむへきにあらざ　死もかならずしも恐れおのゝくべきにあらざ

君子は歿^{ようしう}うたがはず 身をおさめてまつとこそたまへれ（大坪注、孟子盡心上、歿^{うた}不貳^{たか} 脩身以俟之、所以立命也） 又浮屠^{ふと}の 無常とのミとくをきゝて もし死せずハは無常とものたまへり（大坪注、荀子上、修身ニ、趣舍無定謂之無常、ナル句文アレド、コノ文脈ニソグハザレバ後考ヲ俟ツ） いけるものゝ死せるほどの常あるべきか 然るに此段あながちに生をたのしめ死をわするなと教るもうけられす だゝまさにいくべくしていき しぬべくして死して常なれとぞいはまほしき

第九十八段 （大坪注、諸書九十七段、磐齋抄九十八段）

其物につきてその物をついやしそこなふもの数^{かず}をしらすあり 身に虱^{しらみ}あり 家に鼠^{ねずみ}あり 國に賊^{そく}あり 小人に財^{さい}あり 君子に仁義^{じんぎ}あり 僧^{そう}に法あり

此段の君子に仁義ありハ 莊子駢拇馬蹄の諸篇によりていへるなるべし めづらしけなければ議するに及ハス ある註者のいはく いかで仁義が君子をそこなふなれば仁義だてをして化せぬ故也と 予おもへらく 此註仁義だてをしてまことなき故なりと云へし 化せぬ故とハ云へからず いかなるをか化するとはいふ 大舜^{たいしゆん}の仁義によりておこなひ給ふて 仁義をおこなひたまふにハあらざるのたくひなるべし こゝにいたらずして仁義をすれバ仁義にそこなハるゝと思へるにや しからハ大賢より志もつかたハミな仁義にそこなハれんや 此理あるへからず

第一百五段 （大坪注、諸書百四段、磐齋抄百五段）

あれたる宿^{やと}の人めなきに 女のはゝかる事ある比にてつれゝともりゐたるを 或人とふらひ給ハんとて 夕月夜のおほつかなきほとに しのひて尋おはしたるに 犬のことゝしくとかむれは 下す女のいてゝいつくよりそ

といふに やかてあないせさせていり給ぬ 心ほそけなる有様いかて過すらんといと心くるし あやしき板敷にし
 はしたち給へるを もてしづめたるけはひの わかやかなるしてこなたといふ人あれハ たてあけ所せけなるやり
 戸よりそ入給ぬる 内のさまハいたくすさましからず 心にくゝ 火ハあなたにほのかなれと 物のきらなとみえ
 て俄にわかにしもあらぬ匂 いたなつかしうすみなしたり 門よくさしてよ 雨もそふる 御車ハ門のしたに 御供の人
 ハそこく（マツ）にといへと こよひそ やすきいは ぬへかめると うちさゝめくも しのひたれとほとなければほの
 きこゆ さて此程の事とも こまやかにきこえ給に 夜ふかき鳥もなきぬ こしかた行末かけてまめやかなる御物
 語に このたひは鳥も花やかなるこゑにうちしきれハ 明はなるゝにやと聞給へと 夜ふかくいそくへき所のさま
 にもあらねは すこしたゆミ給へるに ひましろくなれば 忘わすれかたき事なといひて立いて給ふに 梢も庭もめつら
 しくあをミわたり 卯月ハかりのあけほの えんにおかしかりしをおほし出て 桂の木のおほきなるかかくるゝ
 まて いまも見をくり給ふとそ

第百六段 (大坪注、諸書百五段、磐齋抄百六段)

北の屋かけに消残りたる雪のいたうこほりたるに さしよせたる車のなかえも霜いたくきらめきて 有明の月さや
 かなれともくまなくハあらぬに 人はなれたる御堂の廊に なミく（マツ）にハあらすとみゆる男 女となけしにしりか
 けて物かたりするさまこそ 何事にかあらんつきすましけれ かふしかたちなといとよしと見えて えもいはぬ匂
 ひのさとかほりたるこそおかしけれ けはひなと ハつれく聞えたるも床し

此二段のごとき更に何事のためにいへると云ことをしらず 老莊をまなぶに益ありや 仏教を修するにたよりす
 るや 遁世閑居の心をきよむるや 世の人の教となるや 後の世の善業となるや ある人 是を狂言綺語して人
 をよろこばしむるべきためぞといへり さいふべき章段もなきにはあらず 老たる尼あまのくさめくといひし事

御堂の児の物がたり 田を論するものうたへにまけて其田をからせける事などは（大坪注、岩波文庫ノ章段デ云へバ、ソレゾレ四十七段・五十四段・二百九段）狂言とも綺語とも云べけれど ふかくあちハへば意味あり こゝの二段ハそのたぐひにもあらず 人の 女のもとにかよふにともなひて その陰私いんしをうかゞひ 男女なんにょひそかに物かたりするが はづれくきこえたるをよるこぶ 是すこし心ある人のあるべきわざかハ 泰子たいし内親王ないしんわうと申し皇女ハ そのおハします宮の内おとこ女の別べつきはめてたゞしくて 男女なんにょ一所いっしょにありけるかた繪にかきたる扇あふまきをさへにくませ給ひて 御覽ごらんぜられざりしとなん申つたへたり（大坪注、泰子ナル名ノ高貴ノ女性ハ、愚管抄、今鏡、十訓抄、中外抄等ノ諸書ニ見ユルモ、ソレラハ高陽院ト称セラレタル女性ニテ摂政関白藤原忠実ノ女ナリ。忠実ノ男法性寺忠通トハ同胞ニシテ、異腹ノ宇治左大臣頼長トモ同父ノ方ナリ。ココニ述ベラレタル皇女内親王ニハ非ズ、又ソノ行状ニ於テモ前記諸書ニハココニ述ベラレタル行状ハ見エズ。然ラバ皇女内親王ニシテ泰子トイフ御名ノ方ハ、大日本史ヲ閲スルモ見エズ。やす子ト訓ムトシテ大日本史ヲ閲スルニ、休子、晏子、保子、恬子、柔子、康子、愷子、靖子、禊子、綏子、樂子ノ十一方アレド、大日本史ニハ該当行状ハ不記ナリ。サレド大日本史ハ後小松帝以前ナレバ後小松帝以後ノ皇女ヲ野史ニヨリ閲セシモ該当者ハ見出シ得ズ。後考ヲ俟ツ次第ナリ）女にょの御身にてだにかく嚴密げんみつにハものし給ふを いかなれば兼好なげしにしりかけたる男女をミル事をよるこぶや 又前の段ハ殊にほどへて思ひ出てかけるさまなり 時にあたりて此事あるだにうるさきを やむことなき老佛の道人いかて年月忘れもやられて心のそこに此事をとめて今この草子にハあらハしつらむ いぶかし

第百八段 (大坪注、諸書百七段、磐齋抄百八段)

女の物いひかけたる返事とりあへすよき程にする男ハ有かたき物そとて 龜山院かめやまのいんの御時 しれたる女房とも わかき男たちのまいらるゝに 郭公ほととぎすやきゝ給へると問て心ミられけるに なにかしの大納言とかやハ 数かずならぬ身ハえきゝ候ハすと答こたへられけり 堀川内大臣殿ほりかわのハ 岩倉いわくらにてきゝて候ひしやらんと仰られたりけるを 是ハ難なんなし数ならぬ身むつかし など定さだめあはれけり すべておのこをハ女にわらハれぬやうにおふしたつべしとぞ 浄土寺前じやうと関白殿くわんぱくハ おさなくて安喜門院あんきもんいんのよくをしへまいらせさせ給ひける故に 御詞などのよきぞと人の仰られけるとかや 山階しな左大臣殿はあやしの下女げじよのみ奉るもいとほづかしく心づかひせらるゝとこそ仰られけれ 女のなきよなりせば衣紋えもんも冠かづぶりもいかにもあれひきつくるふ人も侍らじ かく人に恥はぢらるゝ女いかばかりいみじき物ぞと思ふに 女の性は皆ひかめり 人我にんの相ふかく貪欲とんよく甚はなはたしく物の理ことわりをしらす たゝまよひのかたに心もはやくうつり ことはもたくみにくるしからぬ事をも とふ時ハいはす 用意よういあるかと思はれは 又あさましき事までとはすかたりにいひ出す ふかくたはかりかされることは男の智慧にもまさりたるかと思へは 其事跡よりあらハるゝ事をしらす すなほならずしてつたなき物ハ女なり 其心したかつに隨したがてよく思ハれんことは心うかるへし されは何かハ女のはつかしからん もし賢女けんしよあらはそれも物うとくすさまじかりなん たゝまよひをあるしとしてかれにしたかふ時 やさしくもおもしろくもおほゆへきことなり

此段兼好をのが凡情ぼんじやうをときあらハせるのミならず諸大臣の瑕瑾かきんをさへあばき出して其徳をけがせり おもふに女の物いひかけりたるに返事しがたきハ 淫念いんねんうちにごげばなり おとこに答ふるやうに思はゞ何ぞ返事のしがたからん 兼好かくハとかすしてすべておのこをハ女にわらはれぬやうにおふしたつへしといひ 女のなき世な

りせハ衣紋えもんも冠かぶりもいかにもあれ引つくるふ人も侍らじととけり これらの語天下の人心をそこなひ百代の風俗そくをミだる 舌したをぬきても罪つみあかなふべからず 世の人女にわらハれぬやうにのミつとめば必おとこにハわらハるべし 女にたにわらハれされは男のわらへるハくるしからすや 衣冠いぐんをたゞくし瞻視せんしをたたくするハ人の常行じやうかうなり いかて女のために衣紋をハ引つくるハん さて浄土じやうど寺閔白殿まごの 先王の法言マコにハならひ給ハて安嘉門院(マコ)にならハせ給ふ事と 山階左大臣殿の あふぎて天にはちずふして人にはつまじき官職に居給ひなから あやしの下女にはち給ふとを いミしき事と引いでけるハ何そや 次にかく人に恥らるゝ女と云より下の文に いさゝか女のはつかしからぬ事を云かとおもへはもし賢女あらハといへるより下 この段をむすへる詞にいたりてハ 其ひがこと更に上の文にまされり 賢女をすさまじときらへり それ人の妻妾せしやうハ何事のためにまふくとかするや わか内をおさめしむる也 わか父母につかへしむる也 わか祭まつりをたすけしむる也 継嗣けいしをもとむるなり 餽養きやうをうくるなり これらの事を付託ふたくするに妖態ようたい媚惑びわくの婦よけんや 賢女すさまじといひて 人の婦の貞烈ていれつをふせぎ 人の夫の心をたハれしめ 且そのいへほろぶへきわざハひをひらく 結句にいたりてつるに又まよひをあるしとして かねにしたかふ時やさしくもおもしろくもおほゆととけり 是およそ心ある人の口にいふことを得へきわざかハ 兼好の厚顔かうがん言語かうミちたえぬ ○一註にいはいはく 日本國のおとこに此段をは書ぬきてもしらせたき事にて侍る 此段の文章おそらくハ佛語にもおとり侍るへからす さてもく奇妙なる筆勢にてこそ侍れ 巳 予おもへらく むかしもろこしに身のくさき人あり 妻や子ともく其くさき事にたへかねてともに居る事をえず かねミつからは是をくるしミミ(タマ)て 常ハ海上に出てのミそ有ける こゝに一人ありて此くさきをかぐ事をよろこひ ひるよるかれにちかつきるけるよし呂氏春秋とか云ふミに見え侍る (大坪注、呂氏春秋卷第十四、孝行覽第二、遇合二見エタル話ナリ。人有大臭者、其親戚兄弟妻妾知識、無能與居者、自苦而居海上、海上人有説其臭者、昼夜隨之而弗能去、説亦有若此者) 此註者の此段をたうとへる此くさきをよろこふ人にや たくへんい

かにとなれば 正人端士せいじんたんしこの段をよまハ 巻をすて唾つばきをはきてこそ去ぬへきを 仏語にもおとるましきと悦よろこひぬるはいつこの程ぞや 中間女かんなの性のすなほならぬ事をとける所 すこしまめだちたるやうなれと これほとこの事心得ぬ人もあらじ たゞし文ぶんの奇巧きかうをほめたり 意趣いしゆにハかゝハラズといは、韓柳かんりゆう歐蘇おうそが筆ハ六卿けいよりもたからん歟（大坪注、韓愈・柳宗元・歐陽修・蘇軾ハ蘇洵・蘇轍Vコレ等ハ唐宋八大家ニシテ他ノ二人ハ曾鞏・王安石デアルガ韓柳歐蘇デコノ八名ヲ代表サセタルナラン。六卿ハ、大宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空ノ六大臣） もし日本國の男に此段書ぬきてしらせたらハ 日本國の男ミな賢女をきらひ淫婦いんぷを愛し まよひをあるしとしてかれにしたがふへし わざハひふせぐに道あらめや ○一註にいはいく 人の悪をしるすにハ名をいはずなにかしの大納言とはかりほのかにかきて さまであしからぬをは たゞちに名をあらハしたり 巳上 予おもへらく なにかし大納言は名をあらハすとも浄土寺殿山階殿をは あらハさでこそあらまほしけれ いかにとなれば 二大臣ハ天下の保衡ほうかう（大坪注、宰相ノコト、阿衡ニ同ジ。）として百官を揆度きとし 國家を平治したまふなる人を 女に物いひならひ女をいとはつかしくおもひたまふなど 此ふミにかき残して今の世までにつたへしむいと浅まし この註まことに倒置逆施たうちげましとやいはん（大坪注、倒置逆施ハ、倒行逆施ハ史記伍子胥伝ニ用例Vト同意ニシテ、物事ノ順序ヲ逆サマニ行フ意ナラン）

第一百十二段 （大坪注、諸書百十二段、警齋抄百十三段）

明日は遠國とをきくにへおもむくへしときかん人に 心しつかになすへからんわさをは 人いひかけてんや 俄にわかの大事をもちとなミ 切になけくこともある人ハ 他のこときゝいれす 人の愁うれ喜よろこをもとはすとてなとやとらむる人もなし されは年もやうくたけ 病やまひにもまつハれ いはんや世をものかれたらん人 又是（ママ）におなしかるへし 人間の儀式ぎしきいつれのことかさりかたからぬ 世俗せぞくのもたしかたきに随て これをかならすとせは ねかひもおほく 身も

くるしく 心の暇いとまもなく 一生しやうは雑事ざうじの小節せつにさへられて むなしく暮くれなん 日暮道ひぐさとをし 吾生わが既に蹉跎さくたたり
 諸縁しよえんを放下ほうげすへき時也 信しんをもまもらし 礼義れいきをも思ハし 此心このこころをえさらむ人は 物狂ものぐるともいへ うつゝなし情なさけな
 しとも思へ そしるともくるしまし ほむともきゝいれし

此段ときえたり されと信をもまもらしといふより下の文ぶんハはなはたし をよそ約信やくしんミなまもらすハ是誠なき人
 なり 佛門ぶつもんにも道家たうかにも 誠まことなくて入うへきや 礼義れいきミなやふれハ禽獸きんじゆうのミちならむ そしるもくるしましほむ
 とも聞いれしといへと 郷人きやうじんのあしきにハそしられてもくるしまじ 賢者のほめそしりハ 聞入きこひずハあるへから
 す 兼好かねこうあまりにこゝろよくいひとらむとして大義たいぎをそこなへり 大抵たいてい古人こじんの事を論するをみるに 一偏いつぺんにはな
 はだしきハ その人おほやうしなくだれり 君子くんしの詞ことばハ直截ちよくせつなるやうなれと おのつからかく偏屈へんくつなるかたには
 あらず 兼好かねこうの人のほと此段このくだりを見てもしるへし

第百十九段 或十七段 (大坪注、諸書百十七段、句解百十九段)

友ともとするにわるき者七あり 一にハ高たかくやんことなき人 二にハわかき人 三にハ病やまひなく身みつよき人 四にハ酒さけを
 このむ人 五にハ武たけくいさめる人(ママ) 六にハ虚言そつごする人 七にハ欲よくふかき人 よき友三あり 一にハ物くるゝ友 二
 にハくすし 三にハ智恵ちゑある友

此段も又云へき事なからす 先わるき友を云に 一にハ高たかくやんことなき人とあれども もしへつらはず おも
 ねらす たゞしく交まじる事をしれる人のためにいはゞ 是無益むえきの教なり 二にはわかき人とあり 老らう者もし人こと
 に わかきハわるき友とてすてば 教育けういくの道みちハたえむ 三にハ病やまひなく身みつよき人となん 是も飲食起居おんじききよその人
 にならハゞこそあらめ たゞ我身わがみをはかりて交まじりもし力ちからを用もちべき事ことあらは 其たすけを得えなごせば 必しもわろ
 き友ともにハあらじ たけくいさめる人も猶なほとる所ところなかるへからす 我心わがこころにくめるまゝにこの人ひとくことくくわ

るき友とハいかでさだむる 是ミナ私意より見るなるへし 又よき友を云に 物くるゝを第一とし くすしを次
 とし 智恵あるを又次とす 見れば益者三友の内(大坪注、論語季氏、益者三友 損者三友 友直 友諒 友多
 聞 益矣 友便辟 友善柔 友便佞 損矣) 多聞ひとつをとりて 直と諒とを捨たり 論語のハめづらしげなし
 とて かくいひかへけるにや たゞし ミつから思ひよりて 此三ツを取りでけるにや めづらしげなくとも
 聖言にしたかひよらハ 中くめやすかるべきを かゝる賤陋の語をさへねり出して たゝをのが衣食をおぎぬ
 ひ をのが病苦をたすかる事をのミはかる かれハ天理のおほやけ 是ハ人欲のわたくし 凡聖の作處まことに
 天地懸隔ならずや しかのミならず常人はつねに辞受のあいだにまどひやすし よくえらべと教るだに猶更まじ
 くしてうけ 辞すべくして辞せず しかるを今兼好 公然として物くるゝをよき友とすれば 辞受の義ハ捨たる
 なり 且 友にしなおほし 心友あり 面友あり(大坪注、法言ノ学行ニ見ユ。顔ヲ知ルダケデ心カラ親シマヌ
 友ヲ面友トイフ) 善をすゝむるあり 悪にひくあり いきほひを忘るゝあり たときをさしはさむあり 水の
 ことくなるあり あま酒のことくなるあり 物だにければこれらミなゑらばすしてよき友とすべきや 註家或ハ
 朋友のおくり物ハ車馬といへとも拜せすと云をもて釈するあり 或ハ朋友ハ財を通する道ありと云をもて解する
 もあり 或ハ車馬輕裘共にしてやふるともうらミなけんと云をもてことハれるもあり 或ハ四分律の七法を引て
 註するもありて(大坪注、四分律ハ、四大戒律書ノ一。十誦・四分・僧祇・五分ノ四書ヲイフ。四分律ノ七法ヲ
 引キテ註シタモノハ盤齋抄ニテ、四分律親友ノ意者要下具ニ七法ニ方成中親友上 一難レ作能作 二難レ与能与
 三 難レ忍能忍 四 密事相告 五 互相覆藏 六 遭レ苦不捨 七 貧賤 不レ輕 如是七法、人
 能行者 是親善友 応レ親附レ之。トアリ。) さまざまにあやなせとも 元來語意のいやしきハおほふべき
 やうなし 具眼の人ハおかしかりぬべし

第二百二十四段 或二十二段 (大坪注、諸書百二十二段、句解百二十四段)

人の才能は 文あきらかにして 聖ひしりの教をしへをしれるを第一とす 次には手書事 むねとすることハなくとも是をならふへし 学問に便あらんため也 次に醫術いじゆつをならふへし 身をやしなひ人をたすけ 忠孝ちゆうけうのつとめも醫にあらすは あるへからず 次に弓射ゆみ 馬に乗事 六藝けいにいたせり 必是をうかふへし 文武醫ぶんぶいの道 誠にかけてハ有へからす 是を学まなはんをはいたつらなる人といふへからず 次に食は人の命(ママ)也 よく味あぢひをととのへしれる人 大なる徳とすへし 次に細工さいくよろつに要ようおほし 此外のことゝも 多能たのうは君子くんしのはつる處也 詩哥しいかにたくみに 糸竹しちくに妙たなるハ 幽玄ゆうげんの道 君臣是をおもくすといへとも 今の世にハ これをもちて世をおさむる事 やうやくをろかなるに似たり 金ハすくれたれとも 鐵くろかねの益えきおほきにしかさるかことし

此段にいひおこせる所 又ハ篇首に ありたき事ハ誠しき文の道とかき 第二段に ひじりの御代の政をも忘れといへるわたりをミるに 經学けいがくたうとはさるにハあらず たゞし人の藝能の隨一と心得たるやう也 しかるバ聖人のミちたうとむ事をしりて たうとむゆへをしらさるならし さてこゝに 人の必あるへき藝能を歴叙れきしよするに 手かく事を聖学の次とし 醫をその次とし 末ハ細工さいくにいたれり おほやう六藝の内 礼楽れいがく数をのそきて 醫と調味てうみと細工とをくはへたり 是も前段に辯べんぜしやうに めつらしげなくとも たゞ六藝をいひてやミねかし させる事なきに新意を出すハよからぬわざなり いはんや調味をこのめるは 聖賢のいやしミ給いんしよくへる飲食の人ぞかし 細工にハ又機變のたくミあり 皆うるさし 醫にいたりてハ更に議すへきあり され醫は小道なりといへど 人の司命しめいとして活殺くつさつそのてにあり まなんよく精妙せいめうにいたらされは かならず人の天和てんわをうつ (大坪注、天和ナル語意不詳) 学ぶところ端おほし 脈法みやくあり 藥性あり 方論あり 運氣あり 経絡けいらくあり 鍼灸しんきう ひとつも是をおろそかにせず その人は智まとかに行けたにして つとめておこたらす 純一無雜に力を用て始てまことまことの醫とハなるなり されは朱震亨も醫もまたかたしとそいへる (大坪注、朱震ハ、宋人ノ朱子癸、政和ノ進士、

累官シテ翰林学士トナル。經学ニ精通、漢上先生ト呼バレ、海上易伝ノ著アリ。又、同名ニ、宋人ノ朱震之アリ、号ハ坦齋、益泉集ノ著アリ。又、同名ニ、後漢陳留ノ人、朱伯厚モ朱震ト称ス。後考ヲマツ。世の醫者 おほくハかたしとせざる故に つとめくハしからず 人をあやまる事おほし 人はその醫のあやまちとハしらねとも 神明ハ見とかめ給ふにや 世にひろくおこなハれし醫家の 末のをくれさるハまれ也 伊川先生 親につかふるもの醫をしらすハあるへからずの説あれば（大坪注、伊川先生トハ、程頤デ字ハ正叔、北宋洛陽ノ人。易伝、經説、伊川文集アリ）醫をこそしり給ふらめと 自服じふくのくすりハ人にもとめ給へり まして他人の病を療するまでハいたりたまハざりしにや 大賢すら猶かくなしかたき醫の術なるを 兼好諸藝にとりまぜてすこしならひて身をやしなハんとす かへりて自害がいにちかかへし もし君父を療せんとせば 許きよの世子止しがあやまちいかでなからむ（大坪注、許ハ周ノ國ノ名歟、世子ハ諸侯ノ嗣子ノコトカ、許ハ姜姓、武王ノ時、四岳ノ苗裔ノ文叔、許ニ封ゼラル。文献通考ノ封建考ノ許ニヨル。因リテ姜止ナル人ガ考エラレルモ、未勘）是によりてひそかに思ふに 学者ハたゞ醫道の大略りやくをしりて醫人の工拙こうせつをえらぶにまどハずしてやミなん ふかくきハめてミづから病を療せむとすべからず 兼好儒も醫も たゞその皮膚ひふをなで、骨髓こつずいにいたれりとおもへるが故に かくかろくしくとりまぜて修しゆせよとハ云にや 大抵学者ハ 十五より学にこころざし 孳し々としておこたる事なく 棺くわんをおほふて後にやむ（大坪注、論語ノ、十有五而志于学。孟子尽心上ノ、孳孳為善。晋ノ劉毅伝ノ、丈夫蓋棺事定）その学問思辨がくもんしへんのあいた なにはかりのいとまありて醫をまなんて精熟しゆくせんや 学者ならぬ人とても 又それくの所作（まじまじ）あれば 醫の奥妙おくせうをきハむる隙ハあるへからず 必ならハんと思ふへからず この文のうちにもとけり 一生のうちむねとあらまほしからんことの中に いつれかまさとよく思ひくらへて 第一の事を案じさためて 其外ハ 思ひすてて一事をはけむへし 一日の内一時のうちにも あまたの事のきたらん中に すこしも益のまさらんことをいとナミテ その外をはうち捨て大事をいそくへき也 いつかたをもすてじと心にとりもちてハ

一事もなるへからすとなんいへり（大坪注、通行本章段ノ百八十八段、或者子を法師になして、ノ段ヲ指セリ）
いとよし 此段にては兼好いかで此意趣のうかばさりし

第百五十八段 是より下巻の第廿段 或ハ廿三段 上巻に通してハ第百五十五段 或百五十八段

（大坪注、諸書百五十七段、秀憲稿本百五十八段。警斎抄並句解ハ下巻二十一一段）

筆をとれば物かゝれ 樂器をとれば音をたてんと思ふ 盃をとれば酒をおもひ さいをとれば攤うたむことを思ふ
心は必 事にふれてきたる かりにも不善のたはふれをなすへからず あからさまに聖教の一句をミれば 何と
なく前後の文もミゆ 卒尔にして 多年の非をあらたむる事もあり かりにいま此文をひろけさらましかは此事を
しらんや 是則ふるゝ所の益なり 心さらにおこらすとも 仏前に有てずゝをとり 經をとらは おこたるうちに
も善業をつから修せられ 散乱の心なからも 繩床に坐せは おほえすして禪定なるへし 事理もとより二なら
す 外相もしそむかされは 内證必熟す しゐて不信といふへからず あふきてこれをたうとむへし

この段に 不善と善業とをとけるによりて 予ひそかに思ふ事あり 筆にまかせて書つけ侍るいにしへは 善を
すれば天下それを善人とす 悪をすれば天下それを悪人とす 中世よりしもつかたはしからず をよそ 人善を
すればそれを善人とする人あり かへりて不善人とする人あり 悪をすればそれを悪人とする人あり かへりて
善人とする人あり 是によりて褒貶もたかひやすく 賞罰もあたりかたし それ何かゆへそ かの孝弟忠信にし
て善を称せらるへき人といへと 仏につかへてつとめざれば 人これを悪人とす 孝弟忠信おほつかなき人も
よく仏につかふれば 世ミな是を善人とす されは その所のなにがしこそいみしき善人なれと聞て 心のし
たふまゝに尋行て見侍れば させる善行もなくて常に仏をおかむ人なりけり 又しかくの人こそ悪人なれと云
を 程へてきけば 父母によくつかへ 君にも忠をつくし 身をつゝしミ 心をまことにして さのミ仏にまふ

てざる人なりけり 天下道ふたつ 善と悪とのミ 今その顛倒かくのことし これも又いたましからすや
 考亭夫子のいはく（大坪注、南宋ノ朱熹ノコト。朱熹ガ福建省建陽県考亭ノ地ニイタコトカラ彼ノ号トナル。宋
 史朱熹伝） 浮屠の中國に入れるより善の名たがひをハると 誠なるかな

第百六十六段 或百六十三段 下卷の二十八段

（大坪注、通行諸書百六十五段、整板十一行本・寛永範次書写本・伝元政上人書写本・寿命院抄等ハ、下卷二十
 八段）

あつまの人の 都の人にましハリ 宮この人の 吾妻にゆきて身をたて 又 本寺本山をハなれぬる 顯密の僧 す
 へて 我俗にあらすして人にましはれる見くるし

此段は めにする事ありていへるにや さらすハウたかふへし 出處去就こゝろにまかせぬは人の常のならひな
 り たれか父母の國をさる事をよろこひん 義のをもきにひかるゝをいかむ 殊に沙門は樹下石上の身なれは
 縁にしたかひてゆかさるかたもなかるへし いかて我俗にあらすして 人にましハる事をとかめん

第百九十一段 下卷の五十三 或五十六

（大坪注、通行諸書百九十段、整板十一行本・寛永範次書写本・伝元政上人書写本ハ下卷五十三段）

妻と云物こそ おのこの持ましき物なれ いつも獨ずミにてなと聞こそ心にくけれ 誰かしか智に成ぬとも 又い
 かなる女を取すへてあひ住なときゝつれは 無下に心をとりせらるゝわさなり ことなる事なき女をよしとおもひ
 さためてこそ そひるたらめと いやしくもをしはかられ よき女ならば 此男をそ らうたくして あが佛とま
 もりゐたらめ たとへは さばかりにこそとおほえぬへし まして家のうちをおこなひおさめたる女いと口をし

子なといてきてかしつき愛したる心うし 男なくなりて後 尼になりて年よりたるありさま なき跡まであさまし
 いかなる女なりとも明暮そひ見んにハ いと心つきなくにくかりなん 女のためもなか空にこそならぬ よそな
 から時々かよひすまんこそ 年月へてもたえぬなからひともしならぬ あからさまにきてとまりるなとせんハめつら
 しかりぬへし

あきらかに 妻ハおのこの持ましきものとしらば 幸 をのか好むところの仏戒によりて もつ事なかれとハイ
 かてとかさる 人にハ獨すミときこえて 他所にかくし置く 時くかよひすめとハイかむ これ儒礼にも佛法
 にももれて 人をしる をのれをあさむく世のくせものゝする事なるへし さて人のむこになるが無下に心おと
 りせらるゝわさならハ 東家の牆をこえて處子をひく人をいミしと見んや (大坪注、孟子告子下、踰東家牆而摟
 其處子 則得妻 不摟則不得妻 則將摟之乎) 又ことなる事なき女をよしと思ひさためてこそ そひるたらめ
 とおしはかられ よき女ならば此おとこそそ らうたくしてまもりるたらめ たとへハさはかりにこそとおほえ
 ぬへしといへり 是をいへる兼好の心 更にしりかたし 人の夫婦は人の夫婦なり そのよしあし わがあづか
 るべき事にあらず 何ゆへかく心にハかゝるにや 次に家の内おこなひおさめ 子をうめるが心うくハ 人ハ何事のために妻を
 てかしつき愛したる 心うしといへり 家の内おこなひおさめ 子をうめるが心うくハ 人ハ何事のために妻を
 ばもつにや かなしきかな 兼好淫媾戲慢をのミ夫婦の道とおもへり 詩にいはいく すなハちかくのとき人昏
 姻のミをおもふ 大に信なし 命をしらずと (大坪注、昏ハ夫、姻ハ妻、昏姻ハ即チ夫婦ニナルコト、縁組ナリ。
 詩経国風鄘一之四、定之方中、乃如之人也、懷昏姻也、大無信也、不知命也、) 兼好これにかなへり 又次に
 おとこなくなりて後 あまに成て年よりたる有さま なきあとまで浅ましといへり しからバ人の妻ハ おと
 こ死すれば やかて又 あらため嫁して亡夫の家にハとゞまらぬがよきや もしとゞまらハ髪さげてけさうした
 るかよきや 尼になりてその家に老たるを いかて浅ましとハおもふや 又次に いかなる女なりとも明暮そひ

ミんにハいと心つきなくにくかりなん 女のためにもなかぞらにこそならめといへり 明くれそひみる人にくゝ
 ならば 父母兄弟姉妹ことくくにくゝならんや 五倫りんミな長く愛すへし 妻ひとりいかてにくくハならむ 女
 のためにもなかそらにこそならめとハ わか心にあき風たてばすなハち追出す事にや これら皆たゝ容色ようしよくにのミ
 心ありて 倫理を忘れはてたる也 不仁なり不義なり 無道のいたり也 隠士道者のかりにも云へき詞かハ お
 もふへきわさかハ 後漢の隱者梁鴻りやうこうといひし人ハ 女のあまりに見にくゝて 年三十にいたるまでめとる人なか
 りしを 其人賢けんなりと聞てむかへとりて 布衣ふえをきせてつれて霸陵はれうといふ山の奥にかくれ住ぬ (大坪注、後漢書
 一百十三、又、高士傳ノ下卷ナドニ見エタリ。今、古今事文類聚後集ニヨリ略記ス。同集卷十四人倫部ノ擇婿、
 簡斥数婦ニヨレバ、梁鴻字伯鸞、家貧不娶 同縣孟氏有女、狀肥醜而黑 力舉石曰 擇對不嫁 至年三十 父母
 問其故 女曰 欲得賢如梁伯鸞者 鴻聞而聘之 女求作布衣麻履織篋 作緝績之具……中略……乃共入灞陵山中
 以耕織為業……後略) まことの隱者ハかゝるふるまひこそあるを 兼好口にハ隱逸好むとのミいひ 人にも
 せちにすゝめなから おとなげもなく女人のよしあしをおもひはかり しばゝ男女の私情しじやうをかたる これかた
 ちにも年にも恥す 旁若無人ぼうじやふじんのいたりならずや ○註者のいはく 妻ハもたぬがよけれとも 是非もつならは一
 所にしミつきて この世後の世のほだしとなるよりも かりそめなる契が終にハ心とゝまらてましぞと也 一所
 におもひをとめず かれこれと好色なるものハ 善惡に心うつる 故に善に引入て 善にうつるたよりあり 下
 愚ハうつらすと云やうに 一所に着ちやくしたるハ 善に引入ても移らぬなり されは色このまぬおとこハ 玉の盃の
 そこなき心地すと也 制戒せいがいも人により時による事をこまかに合点てんすへし 一偏に心得しんへからす 已上 (大坪注、
 コノ論評ハ、磐斎抄ノ説ナリ) さても此註者いかなる人なればかゝる事をハ云や 人の心ハいかにもあれ散乱さんらん
 せず動轉どうてんせざるをこそ よろすの道の師も よしとハせらるれ かれこれと移りて好色なるがいかでよからん
 もし惡に着したるものを善に引いれんためとて かれこれと色このませたらバ いよくその惡まして 火に薪たき

をそへたるがごとけん たとひ又 生質せいしつは善人なりとも かれこれと色好ませたらは その善ハきえうせん かゝ
 る遠慮もなくて 口にまかせていひちらし ことに下愚かぐハ移らすとのたまへる聖語せいごを引て(大坪注、論語陽貨、
 唯上知与下愚不移) 證文せうぶんとす 尤あはず 此下愚をいかなるものとみるや 必しも昏愚こんぐの人ハあらず 悪人の
 才力あるものにて 夏桀かきつ殷紂いんちゆうがごとく 色をもかれこれと随分このめる人なり もしかれこれと色を好みてよく
 善に移るものならば 下愚ハうつらすとハのたまふへからず 早竟そうせいこの註者の説 善悪の分辨べんべんなし をよそ男女
 の道夫婦別あるハ善なり かれこれと好色なるハ悪なり しかるを夫婦別ある人ハ一所に着して善にうつらす下
 愚のたぐひなり かれこれと好色なる人ハ善に引いれてよくうつる賢者の徒なりと思へり 是たとへは 流なかれにし
 たがへる舟ハえもすゝまで 流にさかへる舟ハよくすゝむと云がごとし 佛にも儒にも 天にも地にも かゝる
 ことハリあるへき事にや 此説の人をそこなふ事 劔戟にもましぬへし 又いはく 制戒も人により時による事
 を合点すへしと 我この註者に問てまし 家に火をつけぬすミをするも 人により時によりゆるしてくるしから
 さるや 君を弑し父を弑するをハ いかなる時いかなる人にゆるしてくるしからさるや 元悪げんあくの制戒ハ人にも時
 にもよる事にてハなし 註者いはん ぬすミや弑逆しきやくハあまりにはなハたし 好色ハ事かろしと 是又うけられす
 夫婦ハ三綱さんかうのひとつ 人倫におるてもつともをもし そのミだれいにしへも今も からもやまとも たかきも
 いやしきも 老たるもわかきも 制戒せでやハあらむ もし制戒ゆるき時ハ 家やふれ國ほろひ天下もミたるゝ
 にいたる 弑逆しきやく盜賊とうさくと何そ遠からん 邪正ハまことに黑白のごとし たれか此説の是非にまどハん 詞をつるや
 すにハ及ばぬ事なれとも もしわかかくおろかにて此草子好む人 かゝる邪説の毒どくにあたる事もやあると やむ事
 を得ずして愚意をのぶ 人の短たんを称せんと思ふにハあらず さもあれ此書の註解つくる人々の中には 沙門もあ
 りげ也 しからハたとひ徒然草ハよむとも かゝる好色の説にあふてハ うらおぼめきてもすぐせかし こゝろ
 へがほにかくいひちらして 人をそこなふのミならすをのか破戒はかいのほどをもしられ 兼好の罪をもくハふ 浅まし

第二百三十四段 一本に二百廿七段 下巻の九十九段

(大坪注、通行諸書二百三十八段、二百三十七段トスルモノ不明、整板十一行本・伝元政上人書写本ハ下巻九十

九段)

御隨身近友ミすいじんちかともか自讚じざんとて七ヶ條書と、めたる事あり ミな馬藝ばげさせることなき事ともなり そのためしをおもひて自讚じざんの事七あり

人あまたつれて花見ありきしに 最勝光院さいしやうくわういんの邊にておのこの馬をはしらしむるをミて 今一度馬をはする物ならハ馬たふれて落おつへししはしミたまへとて 立ちとまりたるに 又馬をはす と、むる所にて馬をひきたふして の人泥土の中にころひ入 其詞のあやまらさることを人ミな感す

當代たうだいいまた坊ぼうにおハしまし、比 万里小路殿御所までのこうじとのなりしに 堀川大納言殿祇候ほりかは なごん しこうし給し御ミざうしへ 用ありて参りたりしに 論語の四五六の巻をくりひろげ給て た、今御所にて むらさきのあけうはふことをにくむ といふ文を御覽せられたき事ありて 御本を御覽すれとも御らんし出されぬ也 猶よくひき見よと仰ことにて求めるなりと仰らるゝに 九の巻(九)そこゝのほとに侍ると申たりしかは あなうれしとてもてまいらせ給き かほとのごとは児ちことも、常の事なれと むかしの人ハいさゝかの事をもいミしく自讚じざんしたる也 後鳥羽院ごとはのあみんの御哥ミに 袖とたもと、一首のうちにあしかりなんやと 定家卿ていかのに尋仰たつねられたるに

秋の野の草のたもとか花すゝきはにいて、まねく袖とミゆらん と侍れは何事かさふらふへきと申される事も時にあたり本哥ほんかを覚悟かくごす 道の冥加みやがなり高運かううんなりなと ことゝしくしるしをかれ侍るなり 九条相國伊通公さうこく いつうこうの款く状じやうにも ことなることなき題目めいをもかきのせて自讚じざんせられたり

常在光院じやうさいのつき鐘かねの銘めいは 在兼卿あrikaneのみやうの草也 行房朝臣清書ゆきふさあそんして いかたにうつさせんとせしに 奉行(マ)の入道彼草を

取出して見せ侍しに 花の外に夕ををくれは聲百里こゑはくりにきこゆ といふ句あり 陽唐やうたうの韻いんと見ゆるに 百里あやま
かと申たりしを よくそ見せ奉りける をのれか高名かうみやうなりとて 筆者ひつしやのもとへいひやりたるに あやまり侍りけり
数行となをさるへしと返事侍き 数行もいかなるへきにか もし数歩すほの心か おほつかなし

数行なを不審 数ハ四五也 鐘四五歩いくはくならさる也 たゞ遠く聞ゆる心なり

人あまた友なひて三塔順礼さんたつじゆんらいの事侍しに 横川の常行堂きやうたうのうち 龍花院りうけふいんとかけるふるき額がくあり 佐理行成さりかうせいのあひたう
たかひありて いまた決けつせずと申傳つたへたりと 堂僧たうそうごとくしく申侍しを 行成ならはうらかきあるへし 佐理な
らは裏書うらがき有へからず といひたりしに うらハちりつもり虫むしの巢すにていふせけなるを よくはきのこひて 各み侍
しに 行成位署名ぎやうせいよみやうじ年号さたかに見え侍しかば 人ミな興に入

那蘭陀寺ならんだじにて 道眼聖談義たうげんひしりだんぎせしに 八災はさいといふことを忘れて 誰かおほえ給ふといひしを 所化しよけミなおほえさりし

に つほねのうちよりこれくによといひ出したれば いミしく感し侍りき

賢助僧正けんしよそうじやうに友なひて 加持香水かちかうを見侍しに いまたはてぬほとに 僧正そうじかへりて侍しに 陣ちんの外まで僧都そうづみえす

法師ともを返してもとめさするに おなしさまなる大衆おほくてえもとめあはすといひて いと久しくて出たりし
を あなわびしそれもとめておハせよといはれしに かへり入てやかてぐしていてぬ

二月十五日あかき夜 うち更て千本のてらにまふて、うしろより入て ひとりかほふかくかくして聽聞ちやうもんし侍り
しに 優ゆうなる女の 姿にほひ人よりことなるか分入て ひさにゐるかゝれば にほひなともうつるハかりなれば ひ
んあしと思ひてすりのきたるに 猶なほるよりておなしさまなればたちぬ 其後ある御所さまのふるき女房はうの そゞろ
ごといはれしついでに 無下むげに色なき人におはしけりとみおとし奉ることなんありし 情なさけなしと恨奉うらみる人なんある
との給ひ出したるに さらにこそ心得侍らねと申てやミぬ 此事後にきゝ侍しは 彼聽聞かちやうもんの夜 御つほねの内よ
り人の御覽ししりて さふらふ女房をつくりたてゝいたし給て ひんよくハことはなとかけんものそ 其ありさま

参りて申せ 興あらんとてはかり給けるとそ

此七ヶ條をつくくゝと見るに 第一條は六藝のひとつなれば 馬にかばかり鍛練せしぞと也 第二條は聖賢のふ
 ミにもあきらかにて よく記憶せると也 第三條ハ詩賦文章にもくハしきそと也 第四條は臨池のわざ(大坪注、
 王羲之ノ与人書、張芝臨池学書 池水尽黒。後漢ノ張芝ガ池ノスグ側ニテ習字セシ故ニ、池水ガ真黒ニナリシ故
 事ニヨル。習字ノコトナリ)にも入たちしと也 第五條ハ仏書にひろきことをしめし 第六條は智の 人よりも
 さときほどを見せ 第七條は内つゝしミある事をしらせたり 是によりてこれをみるに 兼好まことになへての
 才にハあらさりけらし されど(尊厳調字)本朝に名をえし佛老の道人として 御隨身なにかしこときか自矜(けう)の跡にならひ
 かゝる事とも書きつらねてミつからいミしとおもへるこそ うたてにげなくおほえ侍れ 其ことは又 西行か
 葦(あし)のかれ葉の歌自賛せしやうにもあらて(大坪注、津の國の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり、ヲサ
 ス、コノ歌自讚歌ノ西行十首ノ中ノ七番歌ナリ、御褒灌川歌合廿九番右、新古今集冬等々多クノ歌書ニ出デタリ)
 伊通公定家卿の ことなる事なき事を自讚せられしふる事までとり出 をのか此事するを 人の誹謗(ひはう)せさらんや
 うにとこしらふ いとむつかし そのうへ兼好平生ハ他人のかゝる事あるだに いと心つきなくかたハラいたし
 とこそ思ハれつれ 此事ともにかきりてかくことくしくかきつけをかれたるも 其故しりかたし この書のう
 ちにもいへり 何事も入たゝぬさましたるぞよき 人ハしりたる事とてさのミしりがほにやハいふ(大坪注、通
 行書ノ第七十九段。ナホ、…したるぞよき、よき人は…(マ)後ノよきヲ脱シテ引用シタリ) 又いはく 今ハわす
 れにけりといひて有なむ 大かたハしりたりとも すゞろにいひちらすハ さはかりの才にハあらぬにやときこ
 え をのつからあやまりもありぬへし さたかにもわきまへしらすなどいひたるハ 猶まことに道のあるしとも
 おほえぬへし(大坪注、通行書第百六十八段) 又いはく すべて人ハ無智無能なるへきもの也 ある人の子
 父の前にて史書(し)の文を引たりし 又琵琶(ひば)のちう 落ちたりしかバ 作りつけよと云に ある男の中に ふるきひ

さくの柄ありやなと云 道に心得たるよしにやとかたハラいたかりし（大坪注、以上ハ通行書第二百三十二段）
 又いはく 道をまなぶとならば善にほこるへからず（大坪注、通行書百三十段）又いはく 人としてハ善にほこ
 らざるを徳とす 又いはく 才藝のすぐれたるにても 先祖のほまれにても ひとにまされりと思へる人ハ た
 とひ詞に出てこそいはねとも 内心にそこばくの咎とがあり つゝしミて是をわするへし をごにも見え 人にもい
 ひけたれ わさハひをもまねくハ たゝこの慢心まんなり 一道にもまことに長しぬる人は ミつからあきらかに其
 罪つみをしる故に こゝろさしつねにミたらすして 終つひに物にほこる事なし（大坪注、以上通行書百六十七段） 以
 上の辨論べんことくくたうとぶべくして こゝの自讚じざんと心そむけり 註者自慢まんと自讚じざんとかハリあることをいへど
 （大坪注、諸抄大成ニ、頭書シテ新注ノ説ヲ掲ゲタリ。ソレニヨレバ、自慢ト自讚ト似タルヤウナレドモ大ニカ
 ハリアリ、自慢トハ己カ学問才藝ヲ以テ敖情トヲゴリタカブリテ人ヲナイガシロニスル莫大ノ科ナリ、自讚トイ
 フハ平生我ツトメシ事ヲ、他ハホメタマハヌホドニ、セメテ自ナリトホメテタノマントイフ意ナルベシ。トアリ）
 その実ハ遠からず 釋迦ゆいがとくそんの唯我獨尊ゆいがとくそんの意あるへしといへる註者もありていとおかし（大坪注、コレハ大全ノ説ナ
 リ） たゝ兼好の分上につきていはゝ しゃせまし せずやあらましと思ふ事ハおほやうハせぬがよきに（大坪
 注、通行書第九十八段）かへすくゝうるさき自賛じさんにこそあなれ ある人いはく 自賛じさんの事ハしばらく置ぬ そこ
 にしきりに兼好の好色をせむれとも 此第七條をミるに誠にいはゆる無下に色なき人ならずや 予これにこたへ
 ていはく さにハあらず 兼好平生端直たんちよくの言なりせハ かの聽聞りんもんの夜 御つほねのうちより女房つかハして 膝ひざ
 にかゝらせ ひむよくハことはなどかけん物ぞとハ いかておぼさん 兼好の日ころの淫風いんふうこれにて誠にいち
 じるし びんあしとおもひてたちしハ 兼好その女房のふるまひにて 人のたばかり給ふことをしればなり 是
 又いつもをのれにさる事あるにならひて するならん されはつねく人になれもてあそばれしも分明なり 興
 あらんとて はかりたまふと云を見てしるへし 高たかの師直しちよくにもてあそばれたるのミにあらず（大坪注、太平記卷

第二十一、塩治判官讒死事。ココニ、兼好ガ高師直ニ頼マレ、塩治判官高貞ノ妻ニ送ル艶書ノ代筆ヲセシモ、貞淑ナ塩治ノ妻ハ、御文ヲバ手ニ取りナガラアケテダニ見給ハズ庭ニ捨ラレシカバ、師直大ニ氣ヲ損ジ、イヤク物ノ用ニ立タヌ物ハ手書也ケリ、今日ヨリ其兼好法師、是ヘヨスベカラズ、ト忿リタル記事アルヲ指スナラン

第二百三十九段 一本二百二十六段 下巻の百一段

(大坪注、通行諸書二百四十段、元文五年刊本二百三十六段、整板十一行本・伝元政上人書写本ハ下巻百一段)

しのふのうらのあまのみるめも所せく くらふの山ももる人しけからんに わりなく通ハん心の色こそ 浅あやから
 す哀あはれと思ふふしくの忘かたきこともおほからめ おやはらからゆるして ひたふるにむかへすへたらん いとま
 はゆかりぬへし 世にありわぶる女の にけなき老法師おいほうし あやしのあつま人なりとも にきハしきにつきて さ
 そふ水あらばなといふを 中人(マ) いつかたも心にくきさまにいひなして しられすしらぬ人をむかへもてきたらん
 あいなさよ 何事をか打いつる言のはにせん 年月のつらさをも 分わけこし葉山はのなともあひかたらハんこそ つき
 せぬ言ことのはにてもあらめ すへて よその人のとりまかなひたらん うたて心つきなき事 おほかるへし よき女
 ならんにつけても 品しなくたり 見にくく 年もたけなん男ハ かくあやしき身のために あたら身をいたつらにな
 さんやハと 人も心おとりせられ わか身ハ むかひるたらんも 影はつかしくおほえなん いとこそあいなから
 め 梅の花かうはしき夜のおほる月にたすみ みかきがはらの露分ありあけいてん在明そらの空も わか身さまにしのばるへ
 くもなからん人ハ たゞ 色このまさらんハしかし

此段文章におゐてハ 誠に山のかせぎに似たる我等ごときのものゝ目にも いとやさしくおもしろけれと ひと
 をそこなふへき毒氣どくを内にふくミたれば わかき人くのためには 猶なほくりことをなんし侍る 曲禮まがらみにいはいく 男
 女行媒かうばいあるにあらされは 名を相しらす 幣へいをうくるにあらされは ましハらすしたしますと(大坪注、禮記上、

曲禮上第一、男女非有行媒、不相知名、非受幣、不交不親（兼好これをしりなから しられすしらぬ人をむかへもて来たらむあいなさよとハ いかて云や 詩にいはいく 妻をめとる事いかん かならず父母にまふす（大坪注、詩経國風一、齊一之八ノ東方未明ニ曰ク、藝麻如之何 衡從其畝 取妻如之何 必告父母） 昏義こんぎにいはいく 父ミつから子に醮せうして これに命してむかへしむと（大坪注、禮記下、昏義第四十四、父親醮子而命之迎 男先於女也 トアリ） 兼好これをしりなから 親はらからゆるしてむかへすへたらんいとまばゆかりぬへしとハ いかて云や 孟子のいはく 父母の命 媒はいしやくのことをまたす 穴けつげき隙をきりて相うかゝひ 墻かきをこえて相したかへは 父母國たミ皆にくミいやしむと（大坪注、孟子滕文公章句下、不待父母命 媒酌之言 鑽穴隙相窺 踰牆相從 則父母國人皆賤之） 兼好これをしりなから 見るめ所せく もる人しげきを わりなくかよふ心の色あさからすとハ いかておもふや をよそ妻をめとるにハ 父母媒酌のことをまつのミならず 君にまふし 神につけ 郷黨きやうたうれうゆう僚友にも皆はかりしらせて その別べつをあつくすといへり 兼好これをしりなから いかて人のとりまかなへるハ 心つきなくて ミつからのかくろへことをのミ いミしとハおもへるや 又よき女ならむにつけても しくたり見にくゝ年もたけなん男ハ かくあやしき身のために あたら身をいたつらになさんやハと 人も心おとりせられ 我身ハむかひるたらんも 影はつかしくおほえなんといへり これ殊ほんじやうに凡情の甚しきなり 兼好の品質ひんしつにて いかでかゝる浅あましき事ハ 心にうかべるや その心にハなき事なるを 人のうへにていへりと いはめと 戲言げげんなれとも 思ふより出れハ 心になきハ信じかたし 大抵 丈夫の妻をめとるハ たゝかれと夫婦となるのミなり 色をたくらべ ミやひをたゝかハしめんためにハあらず めとるましくハめとるへからず めとるへき道理あらは なんそ年たけ形ミにくきを恥はぢん 兼好をのが俗情にひかれて そばよりはつかしとおもへるいとおかし さて結語になりて 梅のはなかうはしき夜のおほる月にたゝずミ みかきか原の露わけ出ん有明そらの空も 我身さまにしのはるへくもなからん人ハ たゝ色このまさらんハしかしといへり もしわか身さま

にしのはるへくハ 色を好めと云がごとし 此ことば又人に害あり ○註者のいはく 在中將源氏などのことく
 ならば さもあるへし その身いやしく かほ見にくく 年たけたる法師などハあるましき事なれば うへハ好
 色をかきて下にハかの似あはぬ色このミの人に 興をさまざませたる心あり 巳上 (大坪注、コノ註者ハ諸抄大成
 ノ編者浅香久敬ヲサス歟 諸抄大成ニ、大略同趣旨ノ文見エタリ) 予おもへらく此住(註ノ誤刻ナリ) いひか
 なへたるやうなれと 身いやしからず かほ見にくからず 年たけず 法師にてもなき人のためにハ 却て好色
 をすゝむる方術じゆつとなるへし されは 身いやしく年たけたるか色をこのむハ害すくなし ふかくいましめすしも
 あらん 年わか形うるハしく位たかき好色は 其わさハひ家國天下にもおよべは つとめて制せいせずハあるべ
 からず 本文註者ともにこの遠慮なし 皆にくむへし ○一註にいはく 兼好ハ和歌の人にて儒道をはまもらず
 儒者その心をしらて嘲をなす 巳上 (大坪注、コノ評言ハ諸抄大成ノモノナリ。即チ、兼好ハ和歌ノ人ニシテ
 シキテ儒道ヲマモラザル物ナリ 其心ヲシラデハ 必野槌ノ嘲ヲ誰モナスベキワザニコソ、トアリ) 此註者
 儒道をいかなるものとかしるや 又歌よむ人は儒道をばまもらぬものとおもへるや それ儒ハ 人の人たるゆえ
 んの道也 上ハ王公大人より下ハ匹夫匹婦ひつぷにいたるまで 須叟しゆも是をはなるべからず 唯か父母なからん 誰か
 兄弟なからん たれか夫婦なからん たれか朋友なからん 其父母を父母とし 其兄弟を兄弟とし 夫婦その道
 により 朋友その信をまもる すなハちいハゆる儒なり されハ我ハ儒者ならぬ程にとて かりにも父をあなと
 り母をいやしむへきか 君臣夫婦長幼朋友のあいだ その則のりミだるべからざる事ミなおなし 人その業わざとする所
 ハ 何事にもあれ 此五のともからをみだらば 是人にしてひとにあらざるなり さるゆへに 天下古今おぼえ
 ずしらず人の儒道によるハ 出る時に戸によるがごとし 足あしありとも戸によらずハ 出てゆく事をうべからず
 身ありとも儒によらずハ 世にたつ事をうへからず 釈門ハ方外なり しかれとも その師をたうとむハ父の道
 なり その法眷はうけんをしたしむハ兄弟の道なり その仏につかふるハ臣の道なり いかて儒をのがれえん 然るにひ

とり和歌の人のミ 是によらざる事をえんや いはんや兼好ハ 聖賢の書ひろくまなびて 儒をもたうとはさるにあらす しかるにかゝるひかことのミいへば 儒門いかで嘲らざらん ○一註にいはいはく これ好色の上品をときて なミくの人ハ色このまさらんにかしと云に決したり あたらしき好色のいましめやうなり たとへは庖丁を好む人に 初より庖丁無用といはずして 庖丁このめるからハ 生たる龍の庖丁してこそうれしかるへきを ととも龍もなき程に庖丁好ミてもいらさる事と とゝめたるかごとし 巳上 (大坪注、コノ註ハ、増補鐵槌ノ説ナリ) 予おもへらく 庖丁ハ さいひてとゞめてとゞまる事もあらん こゝに人ありて、もし仙家の胡麻飯くふ事をえばよし (大坪注、胡麻飯ノコト未詳) さらすハ物くひて何かせん もし天女の霓裳羽衣をきる事をえはよし さらすハ衣きて何かせんといはんに されはとて 食をたち衣をすて、凍餒するものあらめやおほやう若年の美色にふけるハ 衣食のもとめよりもせちなり 火に入 水におほるゝもいはず 今好色の上品をときて なミくなるはうれしからずといへるのミにて 人ミな好色に遠ざからんや されは先輩は 慾をふさくことハ壑をミつるかごとく 水をふせくがごとくせよなどこそいへれ (大坪注、谿壑ノ慾、ナドノ語アリ) かゝる甘言をなして 彼すきものゝ心をあらためんとするハ たゝこれ木の葉ひろひて大壑をむめんとし 袂をひろげて洪水をふせがんとする也 何の益かあらん 又たとへは ぬすミするものを責諫せんに 此事やめずハくびきらんと云ハめつらしげなしとて さハいはて なんぢ熊坂の長範には えも及ぶましければ ぬすミしていらさる事と云がごとし いひやうハおもしろくともぬすミハやまし ある人のいはく 周詩に淫風の詩あるハ 人の逸志をこらすとかいへは 此草子の好色の諸段 註家おほやう色をいましむと云も 其理なきにあらざるか 予こたふ 周詩に淫風の詩ある事 朱傳によりてしはらく一義をのべは をよそ人の淫行ハ閨門密室の内 のわさなれハ世の人しらじと思ふより 慾をきハめてやむ事なし しかれともかくれたるよりあらハるるハなけれハ 詩人これを風刺してそのかミの人しらすと云ことなし 聖人その詩を捨てたまはず 後世の淫乱汚穢の人を

して 閨中の密事といへとあらハれざるものにあらずとしらせて ふかくミつからいましめしむと也 兼好の此書つくりて しはく好色をときて さもあらぬ人の志までをそこなふにハ 似るべからず いはく 兼好も詞にハ愆あやまちありとも戒いましめのためと思ひてとかハ その心にハ罪なからん歟 いはく しからず 棘きよくしせい子成 君子ハ質のミととけるハ(大坪注、論語顔淵。棘子成曰、君子質而已矣。)時の人の文かてるを悪ミてなれハ その心に罪ハなければと詞あやまりありて 子貢ここうのためにとられず(大坪注、論語顔淵ニ、上記ニ続イテ、子貢曰、…中略…文猶質也 質猶文也、トアリテ文質トモニ必要トスル反論アリ) 兼好の詞の咎とが 中くこのたぐひにハあらずわれいまその咎をかそふるに そもく兼好の博はく学人たぬ方もなかるへけれど 殊に心にしミしハ仏教と見えたり しからハ一生不犯ふはんの身となれとまでこそとかすとも 邪淫しやいんハふかく禁すべき事ならずや 是一ツ 次に老莊を好まれぬれば 必かならずそれ妄物そせきを粗迹そせきとし 虚無きよぶを妙用とせらるへし 然るに男女の妍媸けんし愛憎あいぞういさゝかわすれもやらぬハ何そや 是二ツ 次に仏老の書にハ婚禮こんりんをとかす もし婚姻こんいんの事にをよハ、儒礼によらずハあるへからず 兼好もとより儒礼にくらからで却て知ざるものゝことし 是三ツ 次に此ふみの内にもとけり 四十にもあまりぬる人 色めきたるかたをつから忍ひてあらむハいかゝハせん ことにうちいて、男女の事人のうへをもちひたハふるゝこそ にけなく見くるしけれとなむ 兼好此ふミ作りて友とするにわるきもの わかき人とかけるをみるに 四十八はやく過ぬらん いかて前言ぜんげんを踐ふまずしてかばかりハ男女の事をいひたハふれけるや 是四ツ 此外なをうたがハしき事おほかれと 筆にうミたればもらず ある人又いはく 我つれく草をみるに そのとく所往しよわうに誠まことに訓誨きんかいとすへし 好色の諸段にいたりてハ心きハめて凡陋ほんろうなり 恐らくハ後人の附會くわい歟 予いはく 誠に好色の諸段旨趣しゆしゆ凡陋なりといへと 詞の艶麗えんれい餘段にかはらす 他人のたやすく及ふへき所にあらず 兼好のしわざ疑なし 早はや竟あひまわれ此草子の大意を察するに 人ハたゝはやく世の常なさを思ひしりて 事をはぶき身をしつかにして 後世ごせいを心にかくへし やむことをえずして物にまじハる程ハ 又そのよろしきにしたかひて

よろつにいミしかれと云にあるかごとし されとも 兼好世の人の此草子をもてあそばさらんことを恐おそれて俗士そくしのその心はへにかなひて うちよろこひて讀ぬへき事とも 所しよくかきませけるとて かく好色の事にをよへる歟 若しからハ 是釈氏のいはゆる欲よくをもて勾牽コウケンして 終に仏智ぶつちにいらしむるの慮思あり 心を用さるにあらず されと又おもふ事あり 宋の呂伯恭 科擧くきよの教をもつて 学者をまねきて終に此道をさとさんとすといへれは 朱子これをしかりとせずして 尋じんをまけて尺せきをなをくする也と思へり 伯恭も意を用られざるにハあらねと 朱子のおしへのつるえなきにハしかす 徒然草をよむ人 こひねかハくハ是をおもへ(大坪注、呂伯恭ハ南宋ノ学者呂祖謙りよそけん。東萊らいト号ス。宋文鑑ヲ編集。張栻・朱熹ト交ル。朱子トノ共編近思録アリ、呂東萊集アリ。宋史ノ呂祖謙伝ヲ参看スヘシ)

貞享五 戊辰 曆

三月吉日

堀川通六角下ル西坪町

栗山伊右衛門板行